

# バカとテストと召喚獣 PA18外伝

Mr. ペンギン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

お久しぶりです。Mr.ペンギンです。

長い間執筆活動から距離を置いていましたが、色々な作家さんの作品を拝見していく内に創作意欲が再び湧き上がってきたので、執筆活動を再開する運びとなりました！

はじめに、この作品はオリキャラのオンパレードであり、島田、姫路、FFF団がアンチになつておりますので、それらを踏まえた上でご覧下さい。

尚、この作品は5、6年前に書いておりました二次小説「バカとテストと召喚獣 エピソードオブPA18」を踏襲していますが、今やその原稿は完全にないので再び最初から書いていきます。

最後に、更新頻度にムラがあるとは思いますが、今度こそしつかり続けていきたく思いますので、生暖かい目で気長に見ていただけ幸いです＜（――）＞

# 目 次

## 第0章 予感

第零話 嵐の前触れ

1

## 第1章 新たな友情と出会いと日常生活

第零・伍話 主な登場人物紹介

4

第壹話 個性的すぎる転入生

12

第貳話 クラス内対立と新たな友情

19

第参話 小さな勇気が起こした奇跡

31

第肆話 芽生え

38

第伍話 決着

47

第陸話 交流会

58

第柒話 変人教師登場

71

## 第0章 予感

### 第零話 嵐の前触れ

?? 「ほん、ここがわしらの新しいステージってこつちやのお。」

?? 「せやな。思つたよりええ感じやんか。ぱつと見は何の変哲もない学校そのものやけど。」

?? 「それに、おい達の行くトコは結構よか感じやつたとね！ あそこならゲームも捲りそうたい！」

冬の寒さが和らぎ、心地よい暖かさを帯びた優しいそよ風が桜の花びらを少し巻き散らしていく中、真新しい制服を身に纏つた複数の男女が文月学園の校門に佇み会話をしていた。

?? 「そー言やあの2人、おら達より一足先にここさ来てるべな。」

?? 「ま、そりやあいつらは事情が事情じやけえのお。何も問題起こそしてなけりやあえんじやが…。何でも、ここにやあえろーいびせえチンパンジーのバケモンがおるっぽいぞ！」

?? 「えつ…！ それって相当おつかないんじや…！」

?? 「アハハ！ あの2人ならなんもっしょ！ 心配しすぎ！」

西村「お前達來ていたのか！ そんな所で立ち話してないで教室に行けよ。案内してやるから。」

鉄人こと西村先生に連れられながら、7人は教室へ向かうのであった。

人類を超えたバカと言われる心優しいある青年とその仲間達、そして個性が強烈すぎる面々が織りなす物語が今、始まるうとしているのである。

~~~~~

明久「ふわ…。眠いな…。」

秀吉「全く、お主と言うヤツは…。朝からよくそんな大きなあくび

をするのお。」

明久「しようがないじやくん、眠いのは眠いんだし。」

所変わつて、ここは全クラスでも最もボロボロな設備のFクラス。大あくびをする吉井明久を、クラスメイトの木下秀吉が少し呆れながら軽く咎めてみるが、当の本人は特に意に介していないようだ。そんな2人に、今度はこのクラスの代表である坂本雄二とムツツリーニこと土屋康太が近寄る。

雄二「気持ちは分からなくもないが、今日はしつかりしてくれよ。何せお前には割と

マジで頑張つてもらわねえといけねえからな。」

康太「……対Aクラス戦の前哨戦。」

明久「分かつてるよ。その時はちゃんとするからさ。にしても今更だけど、雄二も思い切つたことを言い出したよね。」

雄二「なーに、別にそんなこともねえさ。そりや1年間こんなおんぼろで過ごすのが気に入らなかつただけだからな。最下級クラスだからある程度は覚悟していたつもりだったが、流石にこりやあいくら何でも酷すぎるからな。」

秀吉「そうだとしても、あそこまでクラス全員を鼓舞するのは大したものじゃと思うぞ。最初のあのやる気のなさが嘘のようじや……」雄二「まあ、流石にこればっかりは俺だけじやあどうにもならねえからな。それに、これならお互いにとつて損はねえだろ。」

雄二は、作戦通りと言わんばかりにニッと口元を緩める。そんな彼を見て、3人は内心で流石だとつくづく思つていた。すると次に秀吉が、何かを思い出したかのように話を切り出した。

秀吉「話は変わるがお主ら知つておるか？」

明久「ん? 何のこと?」

秀吉「実は今日、この学年に転入生が来るようじやぞ。」

雄二「なに、転入生? 1学期が始まつた次の日にか?」

秀吉「実は朝練の時に見掛けん奴らを見ての。確か――」

康太「……女3人、男4人だ。」

秀吉が言おうとしていたことを予見していたように、康太が遮る。

秀吉はこのことに少し驚きつつも、ウンウンと頷いた。すると今度は雄二が手を顎に添えて思案顔になる。

雄二「成程な…。すぐにすぐ何かあるわけねえと思うが、いずれにせよそいつらとはどつかで関わることがあるってことだな。」

明久「あー確かにそうなるか…。…因みにムツツリーニ、その人達つてどんな感じか詳しく分かつたりするかい?」

康太「……女は3人共、顔もスタイルも良い。……特にその内の1人は、現役の読モだ。」

明久「うん、女の子の身体しか見てないあたり、流石ムツツリーニだね!」

康太「……!?(ブンブンブン!!)

秀吉「そんな全力で否定されても、説得力なんてないぞ…。」

そういう会話している内に、朝礼を報せるチャイムが鳴り、Eクラスとの試召戦争に備えるのであつた。

# 第1章 新たな友情と出会いと日常生活

## 第零・伍話 主な登場人物紹介

★原作キヤラ

吉井明久

在籍：Fクラス

性格：原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

・観察処分者だが、その性格から雄二、康太、秀吉と言った友人や西村を始めとした一部の教師からは信頼されている

・毎日島田、姫路、FFF団から暴行を受けているが、それでもそんな彼らを友人だと思い、いつも許してしまっている

・FFF団に入っていない

・最初は秀吉のことを見下すと思っていたが、優子と出会つてからはちゃんと男と認識するようになる

坂本雄二

在籍：Fクラス（代表）

性格：原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

・明久にいつも暴力を振るう島田達を快く思っていない  
・FFF団に入っていない

土屋康太

在籍：Fクラス

性格：原作通り

在籍：Fクラス

性格：原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

・明久にいつも暴力を振るう島田達を快く思っていない

・FFF團に入っていない

木下秀吉

在籍：Fクラス

性格：原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

・明久にいつも暴力を振るう島田達を快く思っていない

島田美波

在籍：Fクラス

性格：原作よりきつめ

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

・姫路やFFF團共々、他の女子といるだけで明久に暴力を振るう

姫路瑞希

在籍：Fクラス

性格：原作よりきつめ

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

・島田やFFF團共々、他の女子といるだけで明久に暴力を振るう

霧島翔子

在籍：Aクラス

性格：原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

- ・雄二に好意を抱いているのは原作と変わらないが、本作品では彼に対しても暴力を振るうことはそれ程なくなつた

・クラス内で対立が起こつた時、中立の立場に立つていた

木下優子

在籍：Aクラス

性格：概ね原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

- ・当初は勉強できることが第一だと考えていたため、大半のクラスメイトと共に明久らFクラスを見下し、それを良しと思わない光輝、和博、雅治と対立していたが、明久との一騎打ちを通してそれまでの考え方を改め、明久達と友達となり、同時に和解した
- ・次第に明久に好意を寄せるようになる

工藤愛子

在籍：Aクラス

性格：原作通り

容姿：原作通り

召喚獣：原作通り

補足

- ・クラス内で対立が起こつた時、中立の立場に立つていた
- ・一騎打ちの時以来、康太に好意を寄せるようになる

★オリキャラ達

中岡光輝（なかおかこうき）

在籍：Aクラス

得意科目：物理、英語、保健体育

苦手科目：現代文、公民、美術

一人称：わし

誕生日：8月6日

出身：広島県広島市

名前モデル：中岡元

右目の瞳が緑色、左目の瞳が黄色のオツドアイが特徴。夏海の双子の弟で、一卵性双生児の如く非常に似ている。

自由奔放な性格で呑気な性格だが、姉である夏海には中々頭が上がらない。好奇心旺盛で気まぐれな所もあり、周りから嫌われたり見下されている存在でも一切の偏見も無く受け入れる。この様な性分から、当初は和博、雅治と共に優子達と対立していた。医学に秀でている。

中岡夏海（なかおかなつみ）

在籍：Aクラス

得意科目：化学、英語、保健体育

苦手科目：現代文、日本史、美術

一人称：アタイ

誕生日：8月6日

出身：広島県広島市

名前モデル：中岡元

右目の瞳が黄色、左目の瞳が緑色のオツドアイが特徴。光輝の双子の姉で、一卵性双生児の如く非常に似ている。

気が強く男勝りな性格で、弟である光輝を尻に敷く。一方で義理堅く人情味溢れる一面もある。先入観に囚われずに冷静に物事を見極めるこどもでき、優子達と違つて最初から明久達に対してそれ程悪い印象を抱いていなかつた。光輝と同様に医学に秀でている。

重谷和博（おもたにかずひろ）

在籍：Aクラス

得意科目：現代文、日本史、保健体育

苦手科目：物理、地理、家庭科

一人称：わい

誕生日：3月13日

出身：大阪府大阪市浪速区日本橋

名前モデル：清原和博

がつしりした身体に丸刈り頭が特徴。いつも陽気で明るいムードメーカー。大の遊び好きで、底抜けの楽観主義者だが、周りに縛られない柔軟な思考の持ち主でもある。当初は光輝、雅治と共に優子達と対立していた。野球部に所属していおり、甲子園出場を目指している。

空知雅治（そらちまさはる）

在籍：Aクラス

得意科目：世界史、漢文、音楽

苦手科目：保健体育、化学、数学

一人称：おい

誕生日：8月9日

出身：長崎県長崎市

名前モデル：福山雅治

濃いメンツが揃うメンバーの中では比較的常識人の部類に当たるが、少なくとも1日の3分の2をゲームに費やすゲーマーの鑑。それ故いつも眠そうで、目は常に半開き状態である。気まぐれで掴みどころがない氣分屋でもある。キリストンで聖書を常に持っているが、然程宗教熱心ではなく気が向いた時だけ食前にアーメンと言う等ガバガバ。当初は光輝、和博と共に優子達と対立していた。

氷川寛定（ひかわひろさだ）

在籍：Aクラス

得意科目：日本史、古文、英語

苦手科目：技術、化学、物理

一人称：おら

誕生日：12月8日

出身：山形県鶴岡市

名前モデル：鈴木寛定（伴淳三郎）

隻腕で左腕を失っている青年。人見知りが激しく、初対面の人物に会うとすぐに物陰に隠れてしまう。男家族に生まれたことから、女性に対する免疫が非常に薄く、密着されたり露出の高い格好をしているのを見ただけでも絶叫してしまう。人から褒められると照れ隠しで口が悪くなるが、嬉しさを隠せず満面の笑み浮かべてしまう。一方で、友達を何よりも大切に思う友達想いな所もある。一部の相手に「ゞ屋」を付けて呼ぶ。水泳部に所属している。イギリスに在住経験がある。

松井菜々実（まついななみ）

在籍：Aクラス

得意科目：地学、生物、公民

苦手科目：保健体育、物理、技術

一人称：私

誕生日：5月4日

出身：北海道函館市

名前モデル：松井菜桜子

緑色のストレートヘアを肩下まで下ろした小柄な体形で、頭の左側に付けている季節に合わせた花飾りが特徴的な少女。大人しく引っ込み思案で恥ずかしがり屋な性格。争いを嫌い穏健で心優しいが、時々悪意なく毒舌を履くことがあり、トラブルの原因になつてしまつこともある。一方でここ一番での行動力や度胸を持ち合わせており、ここぞと言う時には頼れる存在もある。勘が鋭い一面もあり、探し物が得意だつたりする。美月とは非常に仲が良く、相手をさん付けで呼ぶ中で彼女だけは「みーちゃん」と呼ぶ程。また、性格が似ている

ことから寛容とも仲が良い。誰に対しても敬語で話すが、時々方言が出ることもある。

鈴木美月（すずきみづき）

在籍：Aクラス

得意科目：保健体育、家庭科、数学

苦手科目：地学、技術、漢文

一人称：あたし

誕生日：9月13日

出身：北海道札幌市中央区薄野

名前モデル：鈴木愛奈

読者モデルをやつており、高身長且つ手足が長く高校生離れしたプロポーションとルックスを持つ。さばさばした性格で、明るく周りのフォローが上手。天然パーマでウェーブが掛かつた長い金髪が特徴なギャルだが、前述の正確に加えて「趣味が料理とガーデニング」、「特技がコーディネートと裁縫」、「少女漫画と恋愛ものが好き」、「甘い物が大好物」等非常に高い女子力の持ち主でもある。好奇心旺盛でもあり、お化けや虫に苦手意識がない。

砂辺秀喜（すなべひでき）

担当科目：社会（地理）、美術

一人称：俺

年齢：26歳

誕生日：2月1日

出身：石川県輪島市

名前モデル：松井秀喜

ぐうたらでマイペース且ついい加減で、調子の良い性格。他の教師にもタメ口で話す、生徒とゲームや漫画の貸し借りを平然と行う等教師らしからぬ行動が目立っていることから、教師でありながら西村に目を受けられている。しかしその実、生徒を守るために仕事を放置してでも対応にあたる等教師と言ふ職業に高い誇りを持っている。

その為生徒からの人気は非常に高く、この点に関しては西村ら一部の教員も高く評価している。文太とは大学時代からの友人。アメリカに在住経験がある。

天登文太（あまとぶんた）

担当科目：理科（生物）、技術

一人称：僕

年齢：26歳

誕生日：10月25日

出身：香川県仲多度郡多度津町

名前モデル：高倉文太

束縛を嫌う自由気まで掴み所がない性格。パイロットの経験があるからか高い所が大好きで、電柱の上等どこかしら高い所にいることが多い。様々な動物を無断で飼つており、校内に放牧したり授業に持ち込んだりすることから、教師でありながら西村に目を付けられる。しかしながら教師と言う職業に高い誇りを持ち、生徒の為なら仕事をすっぽかしても対応する。その為生徒からの人気は非常に高く、この点に関しては西村ら一部の教員からも高く評価されている。秀喜とは大学時代からの友人。少林寺拳法五段を持つている。イタリアに在住経験がある。

## 第壱話 個性的すぎる転入生

一学期が始まつてから翌日のAクラス教室にて…

愛子「んく…。」

優子「おはよう、愛子。どうしたの？何かあったの？珍しく冴えない顔してるけど？」

愛子「あつ、優子おつはよ♪実はさ、今日来たらさボクの隣に新しい席があつたんだ♪。隣はいなハズなんだけど…。」

彼女の言う通り、確かに愛子の隣に新しいシステムデスクが設置されていた。昨日は無かつたのにだ。

翔子「…優子の隣にも新しい席があつた。」

優子「ひやつ!? いきなり出てこないでよ、代表！…って、アタシの隣にも!?」

翔子「…（コクリ）」

愛子「新学期が始まつてからまだ1日しか経つてないのに、どうしたの力ナ？」

優子「転校生…かしら？」

翔子「…その可能性はある。」

愛子「でもでも、一学期が始まつてその次の日に転校生つて一体何だろうね…??」

優子「分からぬいけど、そう言うこともあるんじやない？現にこうして来るワケだし。」

翔子「…いずれにしろ、新しい仲間は歓迎する。」

しばらくして朝礼を告げるチャイムが鳴り、それとほぼ同時に担任である高橋先生が教室に入ってきた。

高橋「皆さん、おはようございます。気が付いた人もいると思いますが、今日からこのクラスに転入生が7人来ます。本日のLHRはそんな彼らの自己紹介に充てますので、そのつもりでお願いします。」

『転入生!? そりやまた急だな…!』

『どんな人達なんだろ？ 結構楽しみねー！』

そして、迎えた一時間目のLHR

高橋「お待たせしました。それでは予告通り転入生の皆さんのお紹介を始めます。それではどうぞ、中へ入ってきて下さい。」

高橋がそう言うとドアがガチャリと開き、生徒が入ってきた。

光輝「うわあ……!! ホンマにこがいな教室があるんだあ、よいよぶつたまげたわい…………！」

夏海「何ならこりやあ……?! かあ本当に教室なん……??」

和博「んーと、わいらは三星ホテルに間違えて来てもうたんかいな？」

雅治「まさか同じ国にんな教室がある学校があるとはな……！ 何か色々シヨツキングたい……。」

美月「いやー話ではちらつて聞いてたけどさ、いざこうして見ると圧巻だねー!!」

彼らは一人一人この教室の感想を述べていった。誰しも普通はそう思うだろう。その豪華な設備に圧倒されつつ教卓に上がった。

高橋「えー、それでは早速左側の方から順に自己紹介をお願いします。」

光輝「おつと、呑気に感心しちよる場合じやねかつたか！えーっと、わしゃあ中岡光輝！出身は広島じや！取り敢えずよろしくのつ！次姉貴なう。」

夏海「ほいほい。うんつ、アタイはコイツの双子の姉の夏海。まーぼちぼちよろしくつ！」

和博「次はわいか！わいは大阪出身の重谷和博やー・これからよろしゅう頼むわつ!!」

雅治「おいは空知雅治。長崎の出身たい。まーよろしく。んじや次に回すとよー。」

美月「任せてーーーんーと初めまして！あたし、鈴木美月！北海道の札幌にあるすすきのつてトコの出身のどさんこだよー！よつろしぐううつ！」

美月は最後にビシツとウインクと決めポーズを決め、自己紹介を締めくくった。

『おー!! 色んな所から来てるんだなー!』

『最初の二人は双子っぽいな。姉弟でよく似てるけど…。』

『え、ちょっと待つて…！鈴木美月つて、まさかあの読者モデルの…？！』

『間違いないわよ！だつてほら、一昨日発売したあの雑誌の表紙のど真ん中にあの子写つてたもの!!』

やはり転入生に皆興味津々だが、流石にざわざわしている様子を見兼ねた高橋先生が手をパンパン叩いて静かにしてくださいと注意した。

と、ここで一人の生徒が手を挙げた。

高橋「どうしましたか、木下さん。」

優子「あと二人いると思うのですが、その二人はどうしたんですか？」

そう、今ここにいる転入生は五人だ。つまり本来ならもう二人いるはずだ。すると五人の転入生がハツとしたように気付いた。

和博「ちよい待てよ…、アイツらまさか…！」

愛子「ねえねえ！ドアに隠れてる子がいるよー！」

彼女のこの一言で、全員が一斉に視線をドアに送る。すると一人の男子がドアに、そしてその人物の後ろに女子が一人が隠れているではないか。

「ふえええ…（ガタガタブルブル）」

あまりの力オスつぶりに高橋先生を含む全員が唖然とし、クラスに何とも言えない雰囲気が漂い始めた。一方で、既に自己紹介を済ませた五人はやつぱりかと言わんばかりに両手をあげた。

夏海「おめえらやつぱそこにおつたんか…。早よおこつちけえよ…。アタイらは終わつたけえ、後はおめえらだけで…！」

寛定「そりや分かつてつけど…。で、でもよー…、おら恥ずかしいだよー…！」

菜々実「あうううう…。わ…、私も…き、緊張して震えが止まりません…。」

雅治「あんな…、おはんらが来ねーと先に進まんとよ？」

和博「あかん、これじやキリがねえわ…。光輝、美月！頼むわ！」

光輝「つたくしゃーねーのお…。ほいじやあ美月よ、先にわしが寛定を引き寄せるけん、その後に菜々実を頼まつ。」

そう言うと光輝は突然鞄の中をざごそしだし、中から何かを取り出した。

光輝「おーい寛定よー！これが見えるかー？」

高らかと挙げている彼の右手に持つてている物は…：

愛子「えーっと…、もしかしてあれ、もみじ饅頭なんじゃあ…？」  
彼女の言う通り、光輝が手に持つていたのは広島が誇る銘菓もみじ饅頭だつた。皆の頭が何故と思っている中、寛定はそのもみじ饅頭から絶対に目を離すことなくじつと見つめたまま、臭いをクンクン嗅ぎながらゆっくりと歩み始めた。

光輝「ええか寛定、待てで…！まだ待てじや…！」

光輝は近付く寛定に右手を軽く振りながら左手で制する。そして

光輝「…うしつ、もう良えぞ！」

寛定「いよっしやーーーっ！」

光輝は左手を下ろすと同時に、右手のもみじ饅頭を手渡した。すると寛定は待つてましたと言わんばかりに目を輝かせてそれを受け取り、口でビニールの包装パッケージを剥ぎ取つてもみじ饅頭にかかりついた。

寛定「んーーーっ!!うめえなーーーっ!!」

彼は心底幸せそうな満面の笑みを浮かべてその味を噛み締めてい

る。

光輝「本当は今日の昼飯後のおやつで食う予定じやつたが仕方ねえ。てな訳で美月？」

美月「オツケー☆したつけあたしに任せてつ！」

今度は美月が、未だドアで立ち往生する菜々実に近付く。

美月「よーしょーしなみくん。初めてだからたいした緊張してるんよね。なんもなんも、おつかねえことはねーから、ねつ？あたしと行こうやつ。」

菜々実に近付きそうあやしながら彼女の手をしつかり握り、そのま

まゆつくり教卓に連れて來た。

『な、何これ…? 一体どう言う状況なの…?』

『あの一人、まるで犬か猫みたいじゃないか…。』

一連の出来事を目の当たりにし、周りからは驚きの声が上がった。

雅治「全く…。おはんらはいっちょんブレなかね…。落ち着いたなら、ちやちやつと自己紹介終わらすとよ。」

二人とも鞄から取り出したお茶を飲んだ後、教卓に上がった。

高橋「あつ！ はどうぞ…。」

高橋もあの行動に未だに驚きを隠せてないようだ。これは何も彼女のみならず、転入生以外の全員もそう思っている。そう言つたことも特に気にすることなく、さつきまで怯え切っていたのが嘘のようにはにかみながらゆつくり自己紹介を始めた。

寛定「初めまして。おら、山形出身の氷川寛定だ。こんなオラだげども、1つよろしくなく。」

菜々実「ま…、松井菜々実と言います…。北海道函館市の出身です…。こんな私ですが…、よ、よろしくお願ひします…。先生、これでよろしかつたでしょうか…?」

高橋「ええ、大丈夫ですよ。それでは皆さん、今日から新しくこちらの七人が新しく仲間となりますので、仲良くしてください。そしたら転入生の皆さん、自分の席に着いて下さい。」

そう言うと、彼らはあらかじめ伝えられていた席に着いた。



♪愛子 side♪

さてさて、ボクの所には誰が来るんだろう？ つと思つたその時、さつきもみじ饅頭を幸せそうに食べていたシャイボーイがやつて來たよつ！

氷太「んじや、お邪魔するど。」

愛子「おつ、いらっしゃい♪キミがボクのお隣さん？」

氷太「んだ。おらは氷川寛定。改めてよろしぐな。」

愛子「こちらこそよろしく♪ボクは工藤愛子。趣味は水泳で、ス

リーサイズは78・56・79で、特技はパンチラだよ♪。」

氷太「……何か聞いたやいげねえ事を聞いたまつたような気がすんのはおらだが…?ま、まあともかくよろしぐ…。」

ウン、平静を装つてるケド顔がかなり赤くなつて。正直さつきのアレを見た時点でかなり面白そうだと思つてたけど、これで確信に変わつたよ。この子、間違いないじり甲斐がある!と言つたワケだからもう少し弄つてみよっカナ♪

愛子「何なら、今ここでその特技を披露しようか?」

氷太「ふえつ?!そりやあマズいだーよ!!」

翔子「…愛子、その辺にしてあげて。…まだ慣れてない。」

愛子「はーい。あははつ!キミ、思つた以上に良い反応してくれて面白いネ♪」

氷太「ヴエエ!?慣れる慣れない以前の問題でねえが!?

あー面白いっ!面白かったからちよいちよいじつてみよつと♪

♪愛子 side out♪

♪優子 side♪

愛子つてば早速やつてるのね…。あの男の子、凄く純粹そうだからあの手のものは多分結構苦手なんでしょうね。ちょっと同情しちゃうわ…。それはそれとして、アタシの所には誰が来るのかしらね?

夏海「入るで♪。」

ふーん、この子が隣の席になつたのね。

優子「どうぞ。アタシは木下優子。よろしくね。」

夏海「アタイは中岡夏海じゃ。ま、よろしくな。」

適当に挨拶をすると夏海は席に座つた。あ、確かこの子つて…

優子「そう言えば貴女、双子の姉なんだつけ?」

夏海「ああ。そうじやけど、それがどうかしたん?」

優子「奇遇ね、アタシも双子の姉なの。」

夏海「うおつマジか!弟、パシつちよる?」

優子「当然よ。じゃあ貴女も?」

夏海「勿論!!」

「…………。」

夏海「何かアンタとは気が合いそうじゃな!」

優子「そうね!アタシも丁度そう思った所よ。改めてよろしくね、  
夏海!」

夏海「こつちもな、優子!!」

意外な共通点から新たな友人ができた。何だか久しぶりに嬉しく  
感じたわ。

优子 side out

## 第3話 クラス内対立と新たな友情

色んな意味でショッキングな一時間目が終わって休み時間なった時、7人が一箇所に集まつた。寛定や菜々実を含む彼らは、まるで自己紹介の時に何事も無かつたかの様に明るい表情になつていた。

光輝「ふいゝ。一時はどうなるか思うたが取り合えず無事にスタートは切れたよな！てな訳で例のアレ、やつか！」

夏海「うおっ！アレをやるんかっ！」

和博「何？アレをやんのか！」

雅治「おつと、久々にアレをすつとか！」

寛定「おおー、久しぶりだべなあーつ！」

美月「いよつ！そう来なくつちやネ☆」

菜々実「えへへ…。皆さんでまたできるの、楽しみです…！」

そう言うと彼らは、テーブルにお菓子や飲み物を持ち寄つてきた。

和博「ほな、新しいスクールライフに～～！」

「「「「乾杯～！」」」

彼らは高らかに飲み物が入つたペットボトルや紙パックで乾杯し、ミニ宴を始めた。

光輝「かあー最高じやあーつ！！」

夏海「うわっ、これ旨っ！」

和博「これやつたらいつでも宴が出来るなつ！」

雅治「毎日宴がある生活…、素晴らしいよね！」

水太「おお！皆で楽しく宴が出来るんだべがつ!?おら嬉しいどつ！」

菜々実「さ…、流石に毎日はちょっと疲れるんじやあ…………。」

美月「やりたい時にやれば良いんじやない？流石のあたしでも毎日

毎日はしんどいしさ…。いやー充実してるよね～！」

宴で盛り上がつている中、仮面の優子が怒鳴り込んできた。

優子「ちよつとアンタ達！さつきからうるさいわよ！静かにして頂戴！！」

光輝「おつとそりやすまんかつたつ！流石に騒ぎすぎたんじやな

…。よし、ほいじゃあ声のトーン下げた上でやるけん安心しとくれ  
！」

彼は瞬時に両手を合わせて謝罪し、反省の気持ちを示した。所が、優子の怒りはこれでは收まらなかつた。

優子「そうじやなくつて、宴そのものを即刻やめなさいつて言つてるの！分かつた!?」

和博「悪いがそれは出来へん相談やな。何せこれは、これからこの新天地でも自分らしく頑張ろうやつちゅう意味を始めたちよつとした決起集会みたいなモンや！それに、皆で楽しむことのどこがあかんのん？」

優子「そんなの帰つてやれば済む話でしようが!!下らない……！」

彼女が吐き捨てるように言うと、今度は光輝、和博、雅治が眉間に皺を寄せ、同時にガタンと椅子から立ち上がつた。

雅治「おいおい待ちや！そぎやん言うことなかろーが!!宴言うんはな、皆でぱーっと楽しく盛り上がり上がつてもつと絆を深める大事なモンたい！なしておはんらにやかましか言われんばあかんと?!」

優子「学校は勉強する所よ！はき違えないでもらえる?!」

『そうだぞ！木下さんの言う通りだ！お前らバカじやないのか！』  
『ホントふざけるのもいい加減にしなさいよ！迷惑なのよ！』

『お前ら揃つて学校をナメてんのか！』

そんな優子に加勢する形で、光輝らに批判の声が次々に上がつた。  
優子「ほら見なさいよ！他の皆もそう言つてるけど、まだそんな暢気な事言つてられるのかしら？」

優子は冷たい視線をそのままに、勝ち誇った顔をして彼らを見た。だが3人は焦つたり怯んだりする様子は全く無かつた。すると今度は3人共溜め息をつき、やれやれと肩を竦めた。

和博「あゝあ…。オメエらはなんも分かつてへんない。何つかさ、同情するで…。」

優子「何ですつて？」

和博「あんな、オメエらは『学校は勉強する場所』つちゅう固定概

念に縛られすぎなんや。確かにそれは間違いやとは思わんし、まさにその通りや思う。せやけどホンマに『勉強』だけなんか? 何やオメエらの話を聞く限りやどどーもそう聞こえるんや…。」

優子「それどう言う意味よ…! そう聞こえるも何も、實際そうでしょう?」

光輝「いやいや、案外そうでも無えんじやねえか? おたく、宴は家でもできるつつとつたけどよ、それこそ勉強かて家でも出来るじやろ? やり方どうこうはともかくな。おたくらは『学校』=勉強だけする所』つちゅう認識っぽいが、わしらはそう思わん。わしらはな、学校つてのは勉強もせにやおえんけど、同時に仲間と苦楽を共にしながらかけがえのない楽しい時間を過ごす憩いの場所じやと思うぞ?」

光輝達の持論に耳を傾けていた優子達だが、それでも眉間に皺を寄せて納得いっていない様子だつた。

優子「それを屁理屈だつて言う事をよく覚えときなさい!」

雅治「屁理屈なもんかつ! ここに来たお陰で、出会えた友人がおる奴もおる! おはんらだつてそудじやなかとか!」

優子「世の中学力が全てよ! そんな物は二の次三の次よ!」

光輝「そがん事言うなら極端なこと聞くが、学力がええ奴全員がよいよ良い奴なんか? そうじやねかる! 事実、東大を出た奴でも犯罪者とか役に立たん政治家とかはなんぼでもおるじやろ? つまり、テメエらのその考えは古いんじや!! そこまでして勉強が大事じやつたらな、わしらにぎやあぎやあ言わずに勝手にしちよつたらええじやねえか!」

優子「んな…?! 言うに事欠いてつ…!」

『お前ら生意氣だぞつ! 所詮学力が全てなんだよ!』

『ふざけるのも大概にしなさいよね!』

『そうだそうだ! お前らの方こそ何も分かつていらないんじやないのか!』

雅治「せからしか! その言葉、そつくりそのまま返しちゃるたい!』

『んだとこの野郎!!』

愛子「ちょ、ちよつと皆落ち着きなつて!! 喧嘩なんかしちやダメだ

よ！」

美月「もうよしなよ3人共！流石にやり過ぎだよ!!」

両陣営による小競り合いは次第にヒートアップしていき、1人のクラスマイトと雅治が取つ組み合いをしかけるまでに発展した。見兼ねた愛子と美月が間一髪の所で止めに入り、一旦は落ち着きを取り戻したが、それでも依然両者の怒りは収まらない。

和博「かー不愉快やつ!! もう良えあつちで続きやろうで!!」

宴を邪魔された挙句、説教臭いことを言われてすっかり気を悪くした3人は、教室から出て他の所へ行つた。

『何だよアイツら！ふざけやがつて！』

『大体あの態度は何なの!? 超ムカついたわつ！』

『何であんな奴らがウチのクラスにいるのよ?! 腹立つ——つ！』

優子「何よアイツら?! 何か分からぬけど知つたかぶりして、ふてぶてしいことこの上ないわね!!」

怒りを隠せない優子に、夏海と美月がゆっくり歩み寄つてきた。

夏海「まあまあ優子よ、落ち着きなつて。」

優子「これが落ち着いていられるわけないでしょ！ ちょっとどうなつてんのよアイツら!？」

夏海が優子を宥めようとするが、やはり怒り収まることがない。美月「そりやあうるさくしたこっちも確かに悪かつたけどさ、だからつて流石にあそこまで言うことはなかつたんじやないかなうつて。」

優子「何よ？ まさかアイツらの肩でも持とうつての？」

3人に向けたもの程ではないものの、優子は鋭い視線を2人にも向ける。しかしながら2人はそれに臆することなく、あつけらかんとしている。

美月「別に？ あたしらはあの3人の肩を持つ気なんかないよ？ ただ……、優子達の肩を持つ気も無いんだけどね。」

それを聞いた優子は、きよとんとした表情を浮かべた。

優子「え？ それって一体どう言う事よ？」

夏海「確かにアタイらは少々はしやぎすぎたかもしけん。それは反

省せにやあおえんじやろうな。じやけんアンタの言いたい事も分かる。けどよ、アンタはどーも『優等生』つちゅうモンに捕らわれすぎなんじや。何もアンタだけに限った話じやねえ、他の連中もじやけどもアンタが特にそうじや。そのせいで視野が狭くなつて世界が狭く見えちまうんじや。要はどつちもどつちつて事じやな。」

優子「…何よそれ？意味がさっぱり分からぬわよ…。」

夏海「今は分からなくて無理もねえ。けどいずれ分かる時が来るさ。焦ることはねえよ。」

一方、翔子や愛子を始めとした中立の立場をとつた少数メンバーはこの状況に困り果てていた。

菜々実「うううく…、怖かつたですく…。」

寛定「ふえええく…、工藤屋／霧島屋／。皆これからどうなるんだべがく…！おら達どうすりやあ良いんだべく…！」

愛子「うくん…、アレばつかりは流石にどうにもならない力ナ…。優子達も中岡君達もあんな様子じやあね…。」

翔子「…まさかクラス内で対立が起ころるなんて…。…私も何とかしたいけど、ともかく今はまだ様子を見るしかない。」

美穂「それにしてもこのままだと更に悪化するばかりですよ…。」

利光「僕としてもできることがあるなら力になりたいけど…。何か良い方法はないものか…。三浦君、何かアイディアはないかい？Cクラスの試召戦争で活躍してくれた君なら何か考えがあつたりしないかな。」

彼は打開策を求めて、クラスメイトで同じく中立の立場の三浦直道（みうらなおみち）に目配せをした。久保の言うように、彼は先日のCクラス戦で主に軍師として活躍し、その優れた知略と采配で勝利に貢献してみせた立役者の一人だ。無論、必要に応じてではあるが前線でもしつかり戦っていた。

直道「それがあればすぐにでも言っていますし、実行だつてしています…。しかしこればかりは一筋縄ではいかないでしようね…。お互い我が強すぎる上に、下手に刺激すると余計に悪化しかねない。昨日の試召戦争よりタチが悪いですよ…。」

彼は困り切った笑顔で両手を上げる仕草をとつた。皆、途方に暮れた表情を浮かべていた。

~~~~~

時は流れて昼休み。Eクラスとの試召戦争を控えた明久、雄二、康太、秀吉は、売店の自動販売機でジュースを買っていた。

明久「へへ、これが雄二のオススメかい？」

雄二「ああ。最近発売された代物でさ、初めて飲んだ時はあまりに旨かつたんで本当に驚いたぜ。」

康太「…値段もお手頃。」

秀吉「どれ、早速皆で飲んでみるかの。」

そして、一斉に飲んでみた。

明久「うわあ、これ！」

明雄 康秀 光和 雅寛 「」「」「」「超旨いっ！！」「」「」

8人共見事にハモつた。

明久「えつ、君達も分かるかい！」

光輝「ああ分かるつ！分かるぞ！！」

雄二「だろ！これ旨いだろっ！」

和博「んな旨いモン、わいの地元にやあ無かつたで!?」

康太「…中々イケる。」

雅治「喉越しのよかジユースたい!!」

秀吉「このスッキリとした味わいが何とも良いのう。」

寛定「んだ！おら幸せだべ！」

明久「そう言えば君達、見ない顔だね。名前は何て言うの？」

光輝「わし？わしやあ広島出身の中岡光輝じや。」

和博「わいは大阪出身、重谷和博や。よろしゅうな！」

雅治「おいは空知雅治。長崎の出身たい。」

寛定「おら、山形が出身の冰川寛定だ。おら達はな、今日ここに転入してきたばっかだ。」

~~~~~

雄二「そうか、転入生ってのはお前達だつたのか……なら他のメンツはどうしたんだ？あと3人いるだろ？」

雅治「情報早かねー！あいつらなら教室とよ。さて、おい達はちゃんと名乗つたばい。おはんらも名乗るたい。」

明久「初めまして！僕はFクラスの吉井明久！」

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。」

康太「…土屋康太だ。クラスは同じだ。」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ。よろしくのお。」

光輝「ほう、明久に雄二、康太に秀吉か…。男同士、仲良くしようぜっ！！」

秀吉「お主、ワシが男じやというのが分かるのか!?ワシはとても嬉しいぞいっ！」

光輝「ん？そんな泣いて喜ぶ程か??確かに外見は華奢じやが、一目で分かつたわい！」

明久「それにしても、何だか話し方が秀吉と似てるね。」

秀吉「しかし話しが似てると、どうも親近感がわくの。」  
光輝「じやの。何かお前たあ初めて会つた気がせんのー！」

寛定「皆でこうして出会えたのも何かの縁だ。これからも仲良ぐするだ。」  
明久「へえ、そなんだけ!!それは知らなかつたや。」  
秀吉「しかし話しが似てると、どうも親近感がわくの。」  
光輝「じやの。何かお前たあ初めて会つた気がせんのー！」

寛定「皆でこうして出会えたのも何かの縁だ。これからも仲良ぐするだ。」  
明久「そうだね！よろしくね。」  
雄二「よし、お前らそろそろ行くぞ。」  
雅治「何ね？何かあると？」  
雄二「この昼休みが終わつた後、Eクラスと試召戦争があるんだよ。」

和博「おーせやつたんか!!そいつあ邪魔してすまなんだな。ほな、わいらも帰るか。」

寛定「ぎんばれ!!応援してるぜ！」

明久「ありがとう。頑張るよ！」

こうして彼らはそれぞれ自分達の教室へ戻った。

光輝達は、予鈴がなつた頃に帰ってきた。

「「「ただいま！」」」

夏海「お帰り～～、つてお前らどうしたんだら？ やけに機嫌良さそうじゃの。」

光輝「ひつひつひ、小さな友情を見つけたんじや。實に氣分が良い。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

昼休みが終わってFクラスとEクラスが試験戦争を始めた時、Aクラスの教卓に代表である霧島翔子が立っていた。

翔子「：私達Aクラスは、宣戦布告をしようと思う。」

『宣戦布告つて、どこにするんだ？』

翔子「：Fクラス。」

この発言に、クラスがざわめきだした。

『はあ!? 何であんな最下級クラスに!?』

『Fクラスと言つたら、勉強がろくに出来ない奴らがいるクラスでしょ？ 何でまた？』

翔子の予想外の発言に、次々と戸惑いの声が上がつてくる。

寛定「Fクラスだべが?!」

愛子「そうっぽいケド、どうしたの？」

寛定「あんな、おら達が言つてた小さな友情つてのはFクラスの人間なんだぞ！」

愛子「へへ、そくなんだ。」

優子「それで、何で代表はそのクズクラスに宣戦布告しようと思つたの？」

光輝「おい、木下ア！ いくらなんでもそりやあ言い過ぎじゃありやせんか!？」

優子「あら？アタシ何か間違った事言つたかしら？」

『正論だろ？正しい事を言つて何が悪いんだ？』

『アンタ達は黙つてなさいよ！耳障りよ！』

和博「はん?!なんやとてめえら！表へ出えやアホつたれ共があ

!!!

雅治「おはんら…！おい達の友達を侮辱してただで済むと思うんじゃなかよ！」

またしても一触即発が起こりかけたが、今度は直道が仲裁に入る。直道「皆さん静粛に！…こんな時までいがみ合つてている場合ではないでしょ！それにまだ話は終わつていませんよ！」

美月「そudadよ！わざわざ自習中に言い出すつてことは、それだけ深いワケがあるつてことだよ！…そudadよね、翔子？」

翔子「…2人共ありがとう。理由を話す前に1つだけ先に言つておく。Fクラスは、打倒Aクラスを掲げていてるに違いない。」

優子「えつ？それどう言う事？」

翔子「…詳細迄は分からぬから、まだ何とも言えない。皆には申し訳ないけど、構わない？」

『ま、勝敗は目に見えてるから、良いんじゃないか？』

優子「たかがFクラス。相手にならないだろうけど、やるからには全力で叩き潰してやるまでね。昨日のCクラスみたくね！」

翔子「…じやあ決まり。終結し次第、宣戦布告をする。」

優子「待つて。それならアタシが行くわ。それは別に良いでしょ

？』

翔子「…分かつた。」

こうして意見が纏まり、各自自習に戻つた。

（～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～）

一方明久達は無事Eクラスとの試召戦争に勝利し、教室で寛いでいた。

明久「いやあ、勝つたね。」

康太「…良い意味で予想外だ。」

秀吉「まさか本当に勝つとはの…。しかし雄二よ、本当に設備は交換しなくて良かつたのかの？」

雄二「仮にも俺達の最終目標はAクラスだ。ここで交換して満足なんかされたら困る。だからそんな必要はないのさ。」

そんな風にごく普通の会話をしていると、ドアが開いた。

寛定「うおーい明久屋、皆！」

明久「あれ、寛定じゃないか！どうしてここに？」

寛定「明久屋達が勝つたて聞いたんで、いてもたつてもいられなぐつてなう。おめでどつ！！」

明久「あははそだつたんだ！わざわざありがとう！」

すると再びドアが開き、また誰かが入ってきた。

夏海「入るで。」

秀吉「うむ？ 今度は光輝かの？」

夏海「光輝？ あーそりゃあウチの双子の弟な。アタイは姉の夏海じゃ。よろしくなう。」

「〔えーーーっ!!〕」

彼女の衝撃発言に、4人共驚きを隠せなかつた。

秀吉「何と?! あやつにも双子の姉がおつたのか⁈」

夏海「ん？ にしてもアンタ、何かアタイのダチにえろー似ちよるな。」

優子「ちよつとアンタ達!! 勝手に何やつてんのよ!？」

何だかんだ6人でわいわいやつていると、優子が勢い良くドアを開けた。

夏海「おつと！ 噂をすりやあ來たか優子。」

明久「えつ！ひ、秀吉が二人！」

優子「秀吉はアタシの双子の弟よ。アタシは姉の優子よ。」

秀吉「一体何をしに來たのじや？」

怪訝そうに秀吉が優子に尋ねてみる。彼女は小さく息を吐いて、例のことを告げる。

優子「アタシ達Aクラスは、あなた達Fクラスに宣戦布告します。」

明雄康秀夏寛「「「「えつ!!」」」」

優子「最下級クラスとは言え、一切手は抜かないから、そのつもりで。……って、何で夏海と氷川君までそんなに驚いてんのよ!!アンタ達は内情を知ってるでしようが!!」

夏海「いやあくな、何かノらんとおえんかなあつて思つたんけえ。」

寛定「以下同文だべ。てへへ…。」

2人は右手で頭をぽりぽり搔きながら苦笑いした。

優子「ノらなくて良いわよつ！ほら、宣戦布告したから帰るわよ！」

夏海「あー楽しかった！んじや、バイバイ！」

寛定「うし、おらも戻るど。んじや！」

3人が出て行こうとすると、明久が寛定を呼び止めた。

明久「あのさ寛定！」

寛定「ん?どつた明久屋？」

明久「一つ確認したいんだけど、もしかして寛定も光輝のお姉さんもAクラスなのつ!?」

寛定「んだ！おら達転入生は皆そうだどく。」

雄二「おいおいマジかよ!?」

康太「……予想外…！」

秀吉「そうじやつたのか！」

夏海「うおい！名残惜しいかもしけんが早よ帰るでーつ！」

寛定「あーすまんすまん！今行ぐどく。そんじや！」

こうして1日が終わつた。まさか今日知り合つた光輝達がAクラスだと知り驚いた明久達だつたが、打倒Aクラスと言う目標には変わりはない。この日は驚きの連続だつたが、英知を養うべく今日は解散とした。



★新規オリキャラ紹介

三浦直道（みうらなおみち）

所属：Aクラス

一人称：僕

得意科目：音楽、物理、現代文、世界史、数学

苦手科目：家庭科、日本史、英語

名前モデル：三浦義村

マッシュルームヘアーが特徴的な爽やかな好青年。芸能一家の出身だが、それを鼻に掛けることが無い謙虚で穏やかな性格。運動神経が良い上に、成績は翔子や利光にも迫る程で、試召戦争では随所で戦いながらその恵まれた知略と優れた采配で相手を翻弄する戦う軍師としてクラスの指揮を執り、クラスを支える。1年生の時に彼に勉強を教えてもらったお陰で成績が飛躍的に向上した生徒も多いため、男女問わず人気が高く、教師陣からの信頼も厚い。人当たりも良く、明久達に偏見を持たずに初めから友好的に接する。常に敬語で話す。

## 第参話 小さな勇気が起こした奇跡

宣戦布告されてから2日経つたこの日は、AクラスとFクラスとの試召戦争当日である。前日の交渉によつて5VS5の一騎討ちで決着を付ける事になり、更に翔子の提案で負けた方は勝つた方の言う事を聞く事になつた。

そして現在、Aクラス教室で一騎討ちが行われていた。一回戦は数学で佐藤美穂が島田美波に勝ち、二回戦は総合科目で姫路瑞希が久保利光に勝つて1VS1とお互い一步も譲らぬ接戦を繰り広げていた。

高橋 「それでは三回戦を始めます。選手は前へ。」

明久 「じゃあ行つてくるね。負けたらごめんよ。」

雄二 「取り敢えず全力でな。がんばれよ。」

優子 「あら？ 貴方がアタシの相手なのかしら？ 観察処分者さん。」

明久 「あはははは…。自覚があるだけに、いざ面と向かつて言われると流石に耳が痛いや…。」

高橋 「科目はどうしますか？」

明久 「世界史でお願いします。」

高橋 「分かりました。それでは両者、始めて下さい。」

明優 「サモン！」

世界史

Aクラス

木下優子 387点 VS 吉井明久 172点

優子 「ふうん…。Fクラスの割にはよく取れてるじゃない。」

明久 「これでも自分なりに頑張ったんだけど、やつぱり直前だけつて言うのは流石に無謀だったかあ…。」

優子 「ま、良いわ。早いとこ終わらせてあげる。」

そう言うと優子の召喚獣はランスを構えて、明久の召喚獣に突進を仕掛けてきた。しかし明久の召喚獣は、横にずれて回避し、木刀で足を引っ搔けた。そして転けたところで一気に攻撃を仕掛け、ダメージを与えた。

Aクラス

Fクラス

木下優子 342点 VS 吉井明久 172点

優子「ウソ…、何で…？」

明久「そうだね…。観察処分者の唯一の長所…、とでも言つておこうかな？」

優子「どう言う意味よ…？」

明久「観察処分者はね、召喚獣を使って先生の雑用をこなすんだ。そのお陰で召喚獣を使う機会が多くて、召喚獣の操作に慣れちゃうんだよ。」

優子「成程ね…。それは驚いたわ。アタシとした事が少々見くびつてたみたい。なら何とかして貴方に攻撃を与えてやるわ！」

優子の召喚獣は体勢を整え、再びランスを構え、突き刺してきたが、今度はジャンプして避けて、後ろに回り込んだ所で木刀をぶつけまる。ただ、完全に避けきつた訳ではなく、足をかすつてしまつた為、明久の召喚獣も少しダメージを受けた。

## 世界史

Aクラス

木下優子 271点 VS 吉井明久 150点

『おいおい嘘だろ…!? 学園最低のクラスで、しかも観察処分者の吉井にこんな取り柄があつたなんて…!』

『学園のクズの癖にやるわね…！ 何か逆に腹が立つてきたわ…!』

優子「どうして…、どうしてアタシがFクラスの奴なんかに…！ 観察処分者のろくでなしなんかに…！ クズしかいないFクラスなんかに…！」

この時にも尚Aクラス側からは心無い声が飛び出す。

雄二「くつ…！ あいつら黙つて聞いてりやあ…!!」

康太「…いくら何でも言い過ぎだ…!!」

秀吉「流石のわしも我慢の限界じやぞ…!!」

光輝「おどりやあ…！ どいつもこいつもざけやがつて…!!」

光輝達3人や雄二達が怒りを露わにしつつ、またしても一触即発の事態に発展しけかけようとした、その時だつた。

?? 「あ…、あの…！ ひつく！ その…！ すんつ…！ ふえええ

…………!!

突然誰かが啜り泣く声が教室内から聞こえ、その声のする方に全員が一斉に振り向いた。そこには、菜々実が蹲つて泣き出していた。突然の事態にその場にいた全員が驚いていた。

『ちよ、ちよつとどうしたの…！何で泣いてるのよ?!』

『おいおい別に泣くことないだろう!?どうしたんだよ一体…！』

菜々実「ひつく…！だ…、だつてえ…！皆さん…、喧嘩するから…えつぐ…！」

美月「おーよしよし…！なんもなんも…。」

周りが動搖している中、未だ嗚咽をあげて泣き続ける菜々実に近寄り、軽くハグして頭を撫でながらあやす。あやしながら彼女は、先程明久達を罵倒していたAクラスの面々に振り返えらざるまま問い合わせた。

美月「皆さ…、ななみんがどうして泣いてるか解る…？」

普段明るい彼女からは想像がつかない程その声色は低く、静かに怒っているのが感じ取れた。怒っていると言つても光輝達の様に感情的になつてているのわけではなく、どちらかと言えばあくまでも教え諭すようである。

美月「この子はね、あんた達があの時から喧嘩ばかりしててそれがなまら悲しいから泣いてるの。あたし達が知らない所でけつぱつている同学年の子達に対してそのけつぱりを全否定しているようなことを言うから、それが悲しくて泣いてるんだよ…！あの時対立が鮮明になつてから、この子はずつと最悪の事態になるんじやないかつてびくびくしてるんよ…！この子だけじやない、寛定もだし、あたしだつてそう。」

美月は声を荒げることなく静かに淡々と伝える。すると今度は夏海も話に加わった。

夏海「そりや最初騒ぎ出したアタイらも悪かつたわな。いくら事情を知らんかったとは言え、その件に関してはマジですまんかつたつてのは7人全員がそう思つちよる。じゃがそれと同時に、まさかそれがこがいな大事にまで発展するとは思いもせなんだけどな。つと話が

逸れちまつたが、アンタらは『結果が全て』って言うちよつたけど、案外そもそもねえんじやね？何ならこう言うの、アンタらが身をもつて解つちよるんじやねえか？」

彼女も美月同様に、双方を宥めつつも優子達クラスメイトに諭すよう言葉を選びながら伝える。

『確かにそうかもしれないけど、でもやつぱり最終的には結果が物を言うんじゃないかな…？』

その内のある1人が何気なくそう溢す。すると今度は直道が立ち上がつた。

直道「何もあなた方が言つている」とが間違つているとは言いません。事実、全てにおいて最終的には結果で判断され、そして評価されるのですから。ですがその結果を出すには、プロセスが大切であると言ふことをお忘れではありませんか？何をするにしても、十分な結果を得る為には必ずそれ相応の過程を踏むことになります。あなた方だつて、このAクラスに入るために相当な努力をしてきた筈でしょう。趣味や遊ぶ時間など様々なものを犠牲にしたのでしょうか？」  
「…………。」

2人をフォローするように優子達に語り、問い合わせた直道に対しても遂に優子達は何も言えなくなつた。するとそんな彼らに罵倒されたいた明久が一旦ファイールドから離れ、菜々実の元へ向かつた。彼女を宥め続けていた美月は突然のことに少し驚いていたが、特に警戒する素振りもなく菜々実の顔を上げさせた。その菜々実も最初こそ一瞬ビクツとなつていたが、普段とは違い何故か怯える様子はなかつた。明久「僕達を守るために勇気を振り絞つてくれてありがとう。僕達は全然へつちやらだから気にしないで。」

彼は優しい笑顔で菜々実に礼を述べた。その後ファイールドに戻り、優子に向き直つた。そしてゆっくり口を開く。

明久「木下さんやその他の人も聞いて欲しい。確かに僕は観察処分者で、どうしようもない男だ。実際に自覚してるしね。けどね、人を噂や評判だけで決めつけるのは良くないと思うんだ。だつて、実際に接してみないと分からぬ事があるから…！例えば、雄二はよく僕

の事をからかうけど、何かあつた時にはすぐに力を貸してくれる親友だ。あと、ムツツリーニは色々変わった所があるけど、いつも僕の事を支えてくれる大切な友達。それから君の弟の秀吉は何かと気にかけてくれるかけがえのない友人だ。こんな風に実際に接してみれば、不思議とその人の中身まで見えちゃうんだ。もし僕の言つたことに賛同してくれるなら、一騎打ちの後でも遅くないから、今日からそうして欲しい。観察処分者である僕が言つても説得力にかけるだろうし、寧ろ生意気言つてるつて思われるかもしねりだけど、それだけで判断するのはお互い悲しいし…ね。」

彼は優子や、自分たちに罵声を浴びせていた他のAクラスの生徒達に呼び掛けた。暫く静寂が空間を支配したが、それも長くは続かなかつた。

優子「…………そうね。確かに貴方の言う通りね。ならアタシ、今日から生まれ変わるとするわ。」

明久「へつ？ 本当にっ！？」

優子「ええ。貴方に大切な事を教えてもらつたから。それでアタシもそう思つたもの。…さて、そろそろ決着を付けましょ。」

明久「うん！ そうだね！」

そして、二人の召喚獣はお互いの召喚獣に突撃した。そして—

## 世界史

### Aクラス

木下優子 196点 VS 吉井明久 0点

### Fクラス

高橋「勝者、Aクラス木下優子！」

明久「はあ？…。やつぱり負けちゃつたか…。」

すると優子が明久のもとに歩み寄ってきた。

優子「吉井君、さっきまであんな酷い事を言つてごめんね。それと、アタシに大事な事を教えてくれてありがとう。」

明久「いやいや、僕はただ木下さん達に将来困つて欲しくないと思つただけさ。」

明久はそう言つて微笑んだ。すると優子は、不意に頬を赤く染め

た。

優子「／＼＼＼……！そ、そう……と、とにかく、またいざれこうして勝負をしましよう。」

優子は明久に手を差し伸べた。明久は迷わず優子の手を握り、握手を交わした。

明久「あはは、僕で良ければいつでも良いよ！」

彼らが握手をした時、多くの拍手がまき起こつた。優子がAクラス陣営に戻つてくる際、光輝達に顔を向けた。

優子「中岡君、重谷君、空知君、氷川君、夏海。貴方達に不快な思いをさせてごめんなさい。」

それを聞いた光輝達は思わず目を見開いた。少し前まであんなにいがみ合つてた優子が自分達に対し、素直に謝罪したからだ。そんな優子を見た夏海は、につと笑つた。

夏海「のお優子。オメエ、今最高に良え顔しちよるな。アタイの言つとつた事がやつと分かつたっぽいの。お。」

優子「今更ながらね……。あつ、そうだ！」

彼女は今度は既に泣き止んでいた菜々実と美月の元に駆け寄つた。

優子「松井さん、悲しませちゃつて『ごめんなさい。美月も『ごめん。』菜々実『いいえ、もう良いんです……。解つてもらえたのでしたら、それで嬉しいんです……。』

美月「あたしもでもうなんも！だつてさ、いくらけつぱつても中々結果が出ない人もいるんだしさ！」

菜々実ははにかむ様に、美月は夏海同様にかつと笑つてみせた。それを見て優子も思わず微笑んだ。

『なあ……。吉井つてさ、何かすつげえ良い奴だよなあ。』

『私達、吉井君の事を誤解してたわ。吉井君だけじゃない、坂本君達のこととも……！』

『よし……この一騎討ちが終わつたら謝ろうぜ！』

明久の優しさは、優子だけでなく光輝達と対立していた他のAクラスの生徒の考え方を改めさせた。

和博「何や……、こりやあえらいこつちやな……！」

雅治「ああ……信じられなかよ……！」

寛定「かー…、ぶつたまげただあ～…！」

光輝「まさか明久の優しさがアイツらをこがいにも変えるとはのお…！吉井明久…、実に興味深い。」

直道「一時はどうなるかと思いましたが、ともかくこれで一件落着のようですね！」

利光「全くだ。それにしたつてこの変わりようには流石に驚いてい るよ…！」

美穂「そうですよね。あんなにギスギスしていたのが、まるで始めからなかつたかのような…！」

愛子「だよねー！ボク達だけじゃどうにもできなかつたのに、吉井 君のあの一言だけでこんなにガラツと変わっちやうなんてね～。」

翔子「……吉井は私達にないものを持つてる。：吉井は凄い。」

どうにかクラス内の対立が無事解消され、最悪の事態を避けられて 一安心していたが、同時にクラスの心までも動かした明久の人柄を間 近で見て感心する主要のAクラスサイドであった。

高橋「ここでしばらく休憩に入ります。次の試合は10分後に行い ます。」

2VS1。依然として互角の勝負が続いている。

## 第肆話 芽生え

明久「ごめん雄二。やつぱり負けちゃったよ…。」

三回戦を終えた明久が、両手を合わせながら心底申し訳なさそうな顔を浮かべて雄二達の元に戻ってきた。しかし三人はそんな明久を咎めることはしなかつたし、それどころかよくやつたと言わんばかりの顔をして彼を迎えた。

雄二「なあに気にするなつて。むしろ相手チームの主力の一角である木下姉とあそこまで互角に渡り合えたんだから、ある意味こつちの勝ちさ。」

康太「…しようがないさ。…ナイスファイト。」

秀吉「負けたとは言えども、姉上相手にお主はよくやつたのじや。そんなに気に掛けるでない。」

明久「皆ありがとう。ちょっと僕トイレに行つてくるね。」

雄二「ああ、行つてこい。」

そして、明久は一旦教室から出た。

雄二「なあ？ そう言えば島田と姫路はどうした？」

秀吉「む？ そう言えば見掛けんのお…？ それ以外のクラスの人間はおるようじやが…。」

康太「……それにしても馬鹿に大人しい。」

雄二「…………？…………！ ちょっと待て！ あいつらまさか…………！」

（～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～）

明久「ああ～スツキリした～。」

明久は用を足すと、とても爽やかな顔を浮かべてトイレから出て、Aクラス教室へ向かつた。

明久「遅くなるといけないし、早く教室に戻ろう。」

明久がAクラスに向かつて廊下を歩いていると、二人の人物が突如立ち塞がつた。

島姫「アキ（明久君）！！！」

明久「ん? やあ美波、姫路さん。どうしたのってイダあああー!! ちよつとちよつと一人共どうしたのさ突然?! どうして僕の両腕が曲がらない方向に曲げるんだい?」

姫路「明久君! なに木下さんと馴れ馴れしく接しているですか!!」

島田「そうよそうよ! 何で木下と握手なんかしてんのよ!!」

明久「えーっ! 何かまずかつたの?!!」

島田「握手していた時の木下、めちゃめちゃ嫌がつてたのよ!! 分からなかつたでしょ?!!」

姫路「そうです! なのでそんな木下さんに変わつて私達がオシオキですつ!!」

明久「うわわわわ本当! ちゃんと後で木下さんに謝るからやめて!! いたいたたつ!!!」

姫路「謝つてすんだら警察なんていりませんよつ! 普通に考えればわかることです!」

島田「アンタがやつたのは一種のセクハラ行為なのよつ! だからオシオキするのよつ!!」

明久が彼女達の暴力に喘いでいたその時だった。

パン! パン!

島姫「ひやつ!?」

島田と姫路の頬を叩く鋭い音がした。そして、そこにはさつきまでいなかつた一人の人物がいた。

明久「えつ……? 木下さん……!」

優子「吉井君の帰りがやけに遅いと思つたら、アンタ達揃いに揃つて吉井君に一体何やつてんのよつ!」

明久を守るように島田と姫路の前に立ちふさがり、腕組みに仁王立ちをして二人を睨み付ける。二人は一瞬怯んだが、今度は怒りを優子に向かえた。

島田「ちよつと! いきなり何すんのよ! 邪魔しないで頂戴!!」

姫路「そうです! 暴力反対ですっ!!」

優子「こんなの見れば阻止するのは当然の事でしょう！それと、あの握手はアタシが望んでやつたんだからセクハラには入らないわよ！本当に嫌なら最初から手を差し伸べるなんてしないわよ。こじつけもいい所よ。あと、暴力反対とか言つてたけど、先に吉井君に暴力を奮つたのはアンタ達の方でしょ？！被害者ぶるのやめてくれるかしら？醜いわ！」

一頻り捲し立てる、今度は明久の元へ駆け寄つた。この時の優子は、一騎打ち後に見せた優しい顔になつていた。

優子「吉井君、大丈夫？」

明久「う、うん…。平気平気…。」

優子「とてもそんな風には見えないわよ…。それにしても酷い…！もうこんな奴ら放つておきましよう。関わるだけ時間の無駄よ！肩を貸すわ。そうね、一旦保健室に行つた方が良いわね…！」

そう言つて、優子が明久を担いで保健室に連れて行こうとしたその時――

明久「木下さん、危ないっ！」

優子「え？…きやつ!!」

明久は不意に優子を強く押した。その勢いで優子は尻餅をついた。

優子「よ、吉井君。いきなり何を…。」

優子がそう言いかけた時、ガンガンとさつきまで優子がいた場所にいた明久が二人の釘バットで殴られたのだ。

明久「いつたあああー！？」

優子「…………えつ？」

それを見た優子は、驚きを隠せなかつた。もし自分がそのままそこにいたら、今頃あんなつていたこともしが、それ以上にただでさえボロボロの明久が優子を守る為に、自分が傷付くことを選んだことに驚いた。そんな明久を見た島田達は、ニタリと不敵に笑つた。

島田「あらあら♪そんな女を守る為にそこまでするなんて、ホント優しいんだから♪」

姫路「そうですね♪♪感心しちゃいました♪私達がいると言うの

に、妬けちゃいますね♪これはオハナシ案件ですね♪」

そして、二人は再度明久に暴行を加え始める。

優子「アンタ達いい加減にしなさいよっ!!どこまで吉井君を傷付ければ気が済むワケつ?!」

島田「つるさいわねつ!!ウチらがアキに何をしようとアンタには関係ないでしよう!」

姫路「そうです!他クラスの貴女は引っ込んでおいて下さい!」

そんな口論をしていた時、島田と姫路のいる所の向こうから誰かが全力疾走してきた。

西村「コルアアア!!姫路に島田!貴様ら一体吉井に何をしてる!!」

島姫「に、西村先生!?」

西村「貴様ら纏めて補習室に連行だつ!そこでその腐りきつた精神を鍛え直してやるつ!!」

姫路「そ、そんな!理不尽です!」

島田「何でウチらが!?」

西村「安心しろ。坂本、土屋、木下以外の連中も一緒だからな!それとその釘バットは没収だあ!!そんな物騒なもの、学校に持ち込むんじゃない!!」

島姫「そんなんあーーーつ!!」

二人を担いだ西村に、優子は聞いてみた。

優子「せ、先生。これは一体…?」

西村「あー実はな、高橋先生を通じて坂本から、吉井が危ないって連絡が来てな。3人以外の奴らも吉井を襲う準備をしてたらしいんだが、そつちは3人で潰したってんでまずそいつらを補習室に送つて、それから来たんだ。そう言うことだからこれからこいつらに炎を据えてやるんで、すまんが吉井を頼んだぞ。」

そう言い残すと西村は、島田と姫路を担いで補習室へ去つていった。優子は再び明久に駆け寄つた。

優子「バカツ!!ただでさえそんなに傷付いてるのにどうしてアタシなんかを庇つて…!」

彼女がそう尋ねると、明久は少し笑つて答えた。

明久「だつて、木下さんの様な可愛い美少女が傷付いて苦しむ所を見たくなかつたから…。」

優子「ふえつ：／／／！？」

明久の思わぬ発言に、優子はまた頬を赤く染めた。

優子「で、でも！だからつて無茶はダメ！まずは自分の身体を大事にしなさい！良い！？」

明久「あはは…。善処はするよ…。」

明久は困ったような苦笑いをした。まるで小さい子供を叱るよう

に明久に怒る優子だが、同時に度重なる彼の無自覚な発言にまんざら

でもない様子を見せてもいた。無論、明久がこのことに気づくことは

なかつたが。

光輝「うお～い！」

Aクラス教室の方から光輝と雄二が走つて來た。

雄二「すまねえ明久！くそ…！俺が島田と姫路の様子にもつと早く

氣付いてりや…！」

光輝「おいおいおい明久!!お前どがんしたんならその傷!？」

優子「あ、実はね…。」

（事情説明中）

優子「…つて事があつたの…！」

光輝「ほいじやつたんか…！おつどりやあ…！アイツらよくもわしのダチをこがん目に…！」

優子「とにかく、アタシは吉井君を保健室に連れて行くわ！」

雄二「残念ながら今日は保健室の先生はいねえぞ。」

優子「ええ！こんな時に…！じやあどうすれば…。」

どうすればいいか悩む二人だが、光輝がすかさず立ち上がつた。

光輝「うしつ！ならわしと姉貴で診ちやる！」

この言葉を聞いて、明久と優子が驚いた。

優子「出来るの！」

光輝「ああ。実はの、わしも姉貴も医学の心得があるんじや！治療するのに必要なものは一通り持つちよるけえ、わしらが責任持つて診ようじやねえか！」

明久「気持ちは嬉しいけど大丈夫大丈夫…。いつもの事だからね…。」

それを聞いた光輝と優子は驚いた。

優子「いつもの事つて、まさか毎回島田さん達にやられてるの!?」  
雄二「そうだ。俺達としてもやれる対策とか明久のフォローはやつているが、それでもあいつらはしようもない理由を付けてこういうことをしちまうんだよ…!!」

雄二は苦虫を噛み潰したように吐露する。

光輝「おどれ…！ますます氣に入らんのお…!!ほいじやあわしらは明久を連れて先に教室に戻つちよるぞ！急を要する！」

雄二「ほら明久、歩けるか？」

明久「う…、うん。ありがとう皆…。」

優子「ごめんけどアタシは後から行くわ。すぐ戻るから！」

光輝「分かつた！ほいじや後程な！」

光輝と雄二是自分達の首に明久を腕を組ませ、Aクラスの教師に向かつて移動した。

（優子 sides）

2人が吉井君を連れ戻した後、アタシも現場を後にして歩いて教室へ向かっている。それと同時にちよつとした考え方をしている。それは—

「吉井君、すごいな…。」  
吉井君の事だつた。

今日みたいに一騎討ちでやりあう前は、Fクラス且つバカの象徴である観察処分者だからクズで最低な奴などとしか思つてなかつた。でも、そんなものは大間違いだと言う事に今日気付かされた。

本当の吉井君は強い心を持つてて、何よりもすつごく優しい素敵なお人。彼は自分の事を今の今まであんなに侮辱してたアタシやその他のクラスメイトが更正すると信じて、そして坂本君達を守るために大事な事を教え諭してくれた。それと、さつきアタシが島田さん達の追

撃を受けないようにする為に、身代りになつてくれた。それでなくともあんなにボロボロだつたのに。普通の人でも相当の覚悟がいるけど、吉井君はそうじやない。覚悟がなくても体が勝手に動く。今まで色々な人に出会つたけど、あんなに他人を思える程無限の優しさを持つ人は吉井君だけだと思う。

それにもしてもアタシ、本当に今日どうしたんだろ？今日は吉井君に振り回されっぱなし。さつきから吉井君の事を考へるだけですが、ドキドキするし、胸が高鳴る。こう言うのって、恋愛もので見た事がある。

そう自分で不思議に思つた。だけどそのくせ、すぐにその答えは意外とあつさり叩き出せた。

「アタシ、吉井君が好きなのかな……？いいえ……、アタシは、吉井君が好き……」

なーんだそつか。アタシは間違ひなく吉井君が好きになつちやつたのね。何かこの一日で、吉井君の全てを見た気がした。優しい吉井君。笑顔が眩しい吉井君。真剣な表情がかっこいい吉井君。ヤバい……、好きだつて自覺しちゃつたら、ほつぺが確實に赤くなつたわ。頬に熱を感じるから間違ひないわ。正直恋愛なんて自分には到底縁がないものだと思つてたし、学業の邪魔になるつて思つてたから学生の間は恋愛なんてしないつて思つてたのに、まさかこんなことになるなんて……／＼吉井君に何から何までしてやられちゃつたみたい……／＼

そうね……！そうと分かれば、チャンスを見付けて吉井君にアピールしてみましょっ！だから吉井君、今に見てなさい！絶対に貴方を振り向かせて見せるんだから!!アタシの心を奪つた代償は高いわよ♪

そうこう考へている内に教室に到着した。ドアを開ける前に落ち着きを取り戻す為に深呼吸をした。

／＼ 優子 side out ／＼

優子「ただいま。」

秀吉「おお姉上！帰つて來たか！どうしたのじや？雄二達と同時に

帰つてくるかと思つていたが…。」

優子「ちよつと考え方をしてたの。それより吉井君は…？」

康太「……治療中。」

秀吉たちを始めクラス中の視線の先には、椅子に座らせ点滴を刺された明久を懸命に治療している光輝と夏海の姿があつた。プラスチック手袋を嵌め手術用のキャップを被りながら治療に当たるその姿は、正しく医師そのものだつた。

愛子「ね、ねえ…。あの二人、何であんなことできるの……??普通の外来処置があんな簡単にできるって……！」

流石の愛子もこの状況に驚いていた。この質問に和博が答える。

和博「ああ、あれか? アイツんとこは医者の家系でな。何ならあの二人、医師免許持つとんで?」

「「ええ———っ!!」」

彼の衝撃発言に、一同が驚きの声を上げる。

雄二「ちよつと待てよ! あいつら、本当に俺達と同学年なんだよな?! その段階で国家資格を持つてる奴なんか聞いたことねえぞ!!」

直道「いくら医師の家系と言つても流石にそれは無茶苦茶じやないのでは!?」

寛定「あいづらにはな、デンマークとフィンランドに師匠がいるんだべ。その人達の下で医師としてのあれこれを叩き込まれたんだぞ。手術の時に執刀もしてるし、その才能は瞬く間に開花して難民救済にも大きく貢献したんだべー! するとこれがC I O M S やW H O の目に留まつて、どの国でも通用するように国際医師免許が特例で付与されたんだぞ!」

寛定はふふんと誇らしげに語る。予想以上に壮大なスケールに、この場にいる誰もが圧倒されている。すると—

光輝「うし! 一丁上がりじゃ!! もう良えぞ!」

光輝は自分の汗を拭いながら治療完了を告げた。すると真っ先に優子が明久の元へ飛び込む。

優子「吉井君! もう大丈夫なの!?

明久「僕はこの通りだよ。心配してくれてありがとう!」

心配する優子に優しい笑顔を向ける明久。そんな顔を直視して、またしても優子の頬に熱が帯びていくのであつた。すると、明久は次に道具の片付けをする光輝と夏海にも礼を言う。

明久「あと二人ともありがとう。凄く気が楽になつたよ！」

光輝「なーに気になすな！わしらは当然のことやつたまで！」

夏海「じやけどまだ安静にせえよ！今回だけじやのおてこれまでの

怪我とかもあるけんの！」

無事明久の治療が終わつた所で休憩時間終了のチャイムが鳴り響く。残るはあと二回戦だ。

## 第五話 決着

光輝「取り敢えず一段落付いたなん訛じやが…つて何でFクラス陣営が3人だけなんなら??」

処置をした後に道具の片付けを終えた光輝は、ふうと一息ついた。

明久の処置に余程集中していたのか、周りを見渡して初めてFクラス陣が明久を除いて3人しかいなくなっていることに漸く気付いた。

秀吉「聞くでない…。世の中聞いていいことと聞いてはならんことがあることを覚えておくのじや…。」

康太「……我がクラスながらみつともない…。」

雄二「まあ色々あつたんだよ…。気にしないでくれ。んなことより

おい明久、お前自身はもう大丈夫なのか?」

明久「うん。しばらく安静にしてれば良くなつてくるつてさ。」

康太「……良かつた。」

秀吉「本当に、一時はどうなる事かと思つたぞい…!」

光輝「さて明久よ。その容態で立ちっぱなしはあまりよろしくねえ。大人しゆうせえ。」

明久「大丈夫大丈夫っ！問題ないつて、いつ!?」

彼は両腕を軽く振つて元気になつたことをアピールしようとしたが、それが裏目に出で痛みが走つた。その様子を見て、光輝と夏海が顔をしかめる。

光輝「ばかたれが、怪我人が何を言うか！んなすぐに治るわきやあねかろうが…！」

明久「うつ…。でも…。」

夏海「医者の言う事は絶対じや。ほれ！何か座るモンでも用意しちゃるけえ、分かつたら大人しゆうしとれ！」

明久「うくん…、分かつたよ。」

やられることに慣れてしまつている性分からか、特に怪我を何とも思つていなかつた明久だったが、流石に医師である2人から咎められてしまい、大人しくすることにした。1人の人物は、この状況を見逃さなかつた。

（優子 side）

この時を待つてたわ！早速吉井君に近付けるチャンスが来たつ！  
アタシはすぐさま自分の席から椅子を取ってきて、吉井君に近付く。今よ、行つけえーアタシっ！！

優子「吉井君。アタシので良かつたら座らない？」

明久「木下さん。気持ちは嬉しいけど、僕なら本当に大丈夫だから…ね？」

吉井君つて、ホントに慎ましい人なのね。でもアタシは諦めないわよ！

優子「ダメっ！中岡君達の言う通り体を労らなきやダメなんでしょ？だからこれにでも座つてなさいっ！貴方が気にしなくてもアタシが気にしちやうの！」

明久「そうかもしけないけど、女の子の椅子に座るのつてどうかなつて思うし…。」

中々折れないわね……。こうなつたらこつちも意地よ！

優子「そんな事は気にしなくて良いわよ！だから遠慮なく座つて。ね？」

少し無理矢理過ぎたかもしけないけど、別に問題ないわよね…??吉井君はしばらく考え込む素振りを見せる。そして、出した決断は…。明久「うん…。分かったよ。木下さんがそこまで言うなら…、座らせてもらつても良いかな…？」

キター!!アタシは勿論とばかりに了承した。

優子「当たり前でしょ？さ、どうぞ。」

明久「ありがとう。なら、少し借りるもらうね。」

そう言つて吉井君が遂にアタシの椅子に座つた。キター！吉井君がアタシの椅子に座つてるー！これで椅子に座るのが楽しみになつたわね…。つて、それは流石にはしやぎ過ぎかしら…？うんでもまだ何か足りない気がするわね…。…あつそうだ！

優子「そうだ吉井君！さつきのこともあつたし疲れたでしょ？備え付けで飲み物あるから取つてこよつか？」

吉井君は目を丸くした。あちやー、これは流石に欲張り過ぎたかしら…。

明久「ありがとう！じゃあ、お願ひしちゃおつかな。」（にこつ）

優子「／＼＼＼！」

ちょ、ちょっと吉井君！いきなりそんな笑顔を見せるなんて反則じゃない…／＼＼＼ま、まあでも！攻めてみた甲斐はあつたつてモンよねつ！！／＼＼＼

優子「わ、分かつたわ！取つてくるわね…／＼良い!?ちゃんと大人しくして待つてるのよ!」

はあゝいつて言う吉井君の声を背に、アタシは飲み物を取りに行つた。吉井君と自分の飲み物を持って吉井君の所へ戻る途中に、何故か夏海と愛子がニヤニヤした表情を浮かべてアタシの所に来た。

夏海「いひひつ！のゝ優子ゝゝあんた、明久に氣があるんか♪」（二タニタ）

優子「ふえつ?!い、いいきなり何よつつ!？」

愛子「まつたまたゝゝ分かつてる癖にゝゝ優子つてば可愛い所あるよねゝゝ教室に戻つて来てからの優子、完全に恋する乙女の顔だつたよゝゝ」（ニヤニヤ）

ううつ…………!!何でよりもよつてこの2人にバレるんだろ…？アタシそんなに分かりやすいかな…??何か考えたら恥ずかしくなつてきたわ…。。。／＼＼＼

優子「い、良いでしょ別に！それより愛子、貴女次の試合出るんでしょ！頑張りなさいよねつ!!」

吐き捨てるようにそれだけ言つて、アタシは吉井君の所へ戻つた。さつきのやり取りを遠目から見ていたのか、吉井君はきよとんとしていたけど、特に何か気にする様子はなかつたわ。そのきよとんして吉井君がかわいいって思つたのは内緒よ…／＼＼＼

そして、後半戦開始を告げるチャイムが鳴つた。

（優子 side out）

（愛子 side）

高橋「それでは、只今より四回戦を始めます。選手は前へどうぞ。」  
ボク達の担任の先生である高橋先生が一騎打ちの再開を宣言したら、小柄な寡黙そうな男の子が立ち上がった。多分あの子がムツツリーニ君だね……。

康太「…行つてくる。」

Fクラス陣営（と言つても、坂本君と優子の弟君と吉井君しかいないケド……）にそう言い残してフィールドに上がってきた。ボクも同じようにフィールドに上がってムツツリーニ君と対面する。

愛子「へえ、君が僕の相手か。よろしくね♪」

一応挨拶がてら声をかけてみるけど、ぶつきらぼうに「…よろしく。」って返してただけだった。「ムツツリーニ」って言う通り名にある通り寡黙な子だね。

高橋「教科は何にしますか？」

康太「…保健体育。」

やつぱりそう来たか……。『保健体育だけなら学年で右に出るものはない』って噂は確かに聞くけど、それはどうカナ？っと、その前にやつておきたいことがあるから試しに先にそれやつてみよ♪もし噂通りなら、最高のリアクションが期待できるよね！

愛子「キミいう保健体育が得意なんだ。ボクも得意なんだよ。但しキミとは違つて、実技でね♪」

康太「……実技？（ブシヤアアー！）」

何を想像したのか、ムツツリーニ君は大量の鼻血を噴出して仰向けに倒れ込んだ。アハハ♪予想通り、いやそれ以上に面白い反応してくれるね♪

寛定「はわわわわっ！大丈夫だべが康太屋～！」

そんなムツツリーニ君に慌てて駆け寄るヒロ君。うわー何か健気だね……。そしたらムツツリーニ君が鼻血を拭いながらすくつと立ち上がった。自分からやつといてアレだけど大丈夫だつたのかな：？

康太「…問題ない。」（ドクドク……。）

寛定「んな鼻血まみれで言われても説得力が全くねえど……。」

あはは♪ちよ♪つとからかいすぎちやつたカナ♪? 2人してコントをやつてるみたい♪

高橋 「2人共よろしいですか？早速始めて下さい。」

おつと、流石に遊びすぎちやつたっぽいや。さ、ここからは気持ちを切り替えなきや！

康愛 「サモン！」

保健体育

Aクラス

工藤愛子 479点 VS 土屋康太 1点

点数が表示されたけど、何故かムツツリーニ君の点数が中々現れない。どういうことだろ…? つて、考える場合でもないか？

愛子「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。バイバイ、ムツツリーニ君!!」

自分の召喚獣にムツツリーニ君の召喚獣に突撃させる。けど、さっきまでそこにいた筈のムツツリーニ君の召喚獣がいなかつた。……え??

康太 「…加速完了。」

ムツツリーニ君がそう言つた直後、突然ボクの召喚獣が消滅しちやつた…。な、何…? 今、何が起きたの…?! すると点数が再び表示される。

保健体育

Aクラス

Fクラス

工藤愛子 0点 VS 土屋康太 658点

そ、そんな…。こんないとも簡単に負けちやうなんて…。柄にくショックを受けた…。何が起こったのか未だに頭の整理がつかず、に、力が一気に抜けてその場にガクッと膝をついた。

愛子「そんな…つ！こんなあっさりやられちやうなんて…。ボク、あんなに頑張ったのに…。無駄…だつたの…?」

悔つてたワケじやないけど、流石にショックが大きすぎるよ…。点数だけでもあんなに差を付けられちゃつてるし…、保健体育だけは誰にも負けないつて信じて疑わなかつたのに…。色々とショック

で泣きそうになるボクの所に、さつきまで対峙していたムツツリーニ君が歩み寄った。

康太「……そんな事はないぞ。現にお前はAクラスにいる。…それがお前の努力の証じやないか……俺みたいな出来損ないとは全然違う！…今回の一騎打ちの結果がどうであれ、自分で頑張つたならそれで良いんじゃないのか？」

そうボクを激励してくれるムツツリーニ君の顔はやつぱりちよつとぶつきらぼうだけど、それでもボクのことを認めてくれて、物凄く嬉しかつた…！どうしよう、今度は嬉しくて泣いちやいそうだよ…！でもここは涙なんてナシナシ!!負けちゃつたものは負けちゃつたんだし、結果はちゃんと受け入れなきやね！

愛子「ムツツリーニ君…!!…ありがとっ！何か吹つ切れたよ！」

康太「…そ…う…か、な…ら…ば…良…か…つ…た…」

愛子「／＼／＼！ホントにありがとねつ！」

さつきまで無表情だつたのに、急に笑つちやつてびつくりした！と言ふかボクどうしたんだろ…??その笑顔を見たら、急にドキッとなつちやつたんだけど…?

康太「…俺は自分の思つた事を素直に言つただけだ。もしお前の努力を笑う奴がいたら、この俺が吊し上げてやる。…だから、自分の努力に誇りを持て。」

愛子「つ？／＼／＼

も、もおおお〜!!／＼どうしてボクが今一番欲しい言葉をそんなにぽんぽん並べてくれるの…！それにさ…、また胸がドキッとしちやてる…。こ、これつて…??

……ああそつか。これつて優子が吉井君に向けるものと同じものなんだ…！ボク、ムツツリーニ君が好きになつちやつたんだ…／＼だつてだつて!!確かにちよつと不愛想な所はあるけど、ボクの努力をあんなに評価してくれて嬉しくない訳ないじやん!!普段口数が少ないけど、あんな優しさを向けられて好きになつちやうに決まつてるじやんか…／＼あはは…。こりや優子のこと、もう弄れないや…。

そうしてボクが陣営に戻ると、夏海と優子がニヤニヤした表情を浮かべてた。ちょっと待つて…？まさかとは思うケド…！

優子「ね～愛子？アンタ実は土屋君の事が好きになつたんじゃないの～？」（ニマニマ）

きやああーーっそのままかだつたーーーーっ！！なつちーはともかく、優子はさつきの件もあるから余計に良い顔してよーーーーっ！

愛子「ふえっ!?な、何さ急に!?」

夏海「お～お～愛子お～…♪アンタも人の事言えん様じやの～♪ほれ、誰にもバラさんけえ正直に言うてみ～？うりうり～♪」

愛子「え、えつと…………！だつて…、その…!!」

もーー！2人共やめてーーっ！

それもこれもムツツリーニ君のせいだ！勝負で負かすだけじや飽き足らずに、ボクの気持ちまで奪つたんだもん！当然覚悟の上だよね♪他の女の子を撮つたりするのは良いケド、ムツツリーニ君の身も心も奪つてみせるだから!!その時は実技のこともいーつぱいするから覚悟しといてネ、ムツツリーニ君つ♪

（愛子 side out）

高橋「では五回戦を始めます。選手は前へどうぞ。」

高橋先生がこう告げると、最終戦を控えていた双方の対象がフイールドに姿を現す。

雄二「んじや、行つてくるか。」

翔子「…（すつ）。」

高橋「教科は何にしますか？」

雄二「日本史で、小学生レベルの百点満点上限ありだ。」

高橋「そしたら問題を用意します。では、二人は視聴覚室でお待ち下さい。」

雄二と翔子は教室を後にした。そんな2人を、双方は固唾を呑んで見守る。

30分後、テストを終えた二人が戻ってきた。

高橋「お待たせしました。では結果を発表します。」

Aクラス

Fクラス

霧島翔子 98点 VS 坂本雄二 51点

高橋 「勝者、Aクラス！」

翔子 「…雄二、私の勝利。」

雄二 「ああ…、分かってるよ…。」

翔子 「…と言うわけで、約束。私と付き「ちよいと待つた！」？」

翔子が最後まで言おうとした時、夏海が割って入ってきた。

夏海 「急に割つて入るようすません。ちょっと良いか翔子。」

翔子 「…何？」

夏海 「その約束とやら…、アタイに使わせてくれんか？大丈夫、翔子だけじやのうて優子とか愛子にもメリットはあるけん。」

突然の要望に、翔子も雄二も驚いていた。

翔子 「…？…物による。」

夏海 「あんなく、美月とかウチの他のメンツとも話したんじゃが…。」

そこから先の内容は翔子にしかわからなかつた。夏海が翔子に耳打ちをし始めたからだ。それを聞き終えた翔子は、少し考えた。そして――

翔子 「…そこまで言うなら分かつた。…私は問題ない。」

夏海 「助かる！ほいじやあ…。」

夏海は雄二や明久達に向き直り、先程耳打ちした内容を伝えた。

夏海 「明後日の日曜日、アタイらでパーツと交流会でもやろうや！」

これがアタイの命令じや！！（ペカーン！）

それを聞いた明久達は少し驚いたがみんな賛成した。

明久 「うん！良いけど、どこに行けば良いかな？」

美月 「そだね…、特に考えてなかつたけど9時に駅前の噴水広場に集合つて事でどう？」

明久 「うん。分かつたよ。」

雄二 「噴水広場だな？承知した。」

康太 「…了解。」

秀吉 「たまにはそう言うのも良いのぉ。」

翔子「…楽しみ。」

優子「友達と集まつて出掛ける何て久しぶりね。」

愛子「今からもう楽しみだよ♪」

と、ここで光輝達がテーブルの上にジュースやお菓子をセットした。

光輝「さて、Aクラスが勝利したけえ一つ宴でもすつか！」

和博「おーせやな！ドーンとやろうや！」

純忠「っしゃあ！盛り上がつとか！」

宴をしようとしている光輝達に、優子が近付いてきた。

優子「ねえ。良かつたらアタシ達も混ぜてくれない？」

ピシッ。空気が再び緊迫に包まれた。そもそもそのはず、優子は当初光輝達と対立していたのだから。光輝達は、やや険しい表情になつた。

光輝「おんどりやあ貴様…、あん時わしらに何て言つちよつたんなら…？あんだけ言いやがつて…！」

優子や彼らに対立していた他の生徒達が焦り始める。

光輝「わしらがその言葉をどんだけ待ち望んじよつたと思うちよるんじやあ？」

その言葉を聞いて、優子達の焦りは驚きに変わつた。それと同時に、光輝達は満面の笑みを浮かべた。

和博「わいらを待たせた落とし前、きつちりつけてもらうでっ！」

純忠「おはんら、早く好きなモン持つて来るばい！乾杯して、宴を始めるとよつ!!」

彼らの言葉で皆一齊にコップを取り、ジュースを入れた。勿論明久達もだ。

和博「ほな、我らAクラスの勝利と和解、それに明久達の大健闘を祝して～！」

『『『乾杯～!!』』』

皆で盛大に乾杯をし、盛り上がつた。

『吉井、これ旨いぞ。食べてみてくれ！』

明久「えつ、本当？ありがとう！」

『坂本ーー！お前らの事を悪く言つてごめんよーー！ウオーー！』

雄二「なあに、気にすんなって。分かったから号泣すんな…。」

それまで学力、もとい結果が第一としかみていなかつたが、明久の優しさに触れ、Aクラスの雰囲気が大きく変わつた。そんな様子を見て、一部の者は安堵の息を漏らした。

夏海「ウンウン、こうでなくつちや。」

寛定「一時はどうなるかと思つたどー。」

菜々実「はい…！皆さん仲良くなれて良かつたです……♪」

愛子「ホントに良かつたよ。」

利光「正直、これに関してはどうにもならないと思つていたけど、結果オーライだね。」

そして翔子は、明久に歩み寄つた。

翔子「…吉井。」

明久「ん？どうしたの？」

翔子「…ありがとうございます。私、どうしたら良いか分からなかつた。Aクラス代表として礼を言わせてほしい。」

そういうと、翔子はその場でぺこりと頭を下げた。

明久「いやいやいや！頭を上げてよ！僕はただ、皆なら分かつてくれると思つたから…ね？」

直道「吉井君、僕からも1つ礼を言わせて下さい。」

たじろぐ明久の元に、今度は直道もやつて來た。

直道「正直、今回起つてしまつていた対立は僕でもお手上げでした。そりやあ考え方人それぞれで、人がいればいる程そこに違ひが生じるのは至極当たり前のことなんですが、それがまさかこのよう大事に発展するとは思つてもみませんでした…。どちらも我が強いものですから、どちらかが折れるなんてこともなく、僕達中立派はどうすれば良いか見当もつきませんでした…。」

明久「…………。」

明久は黙つて直道の話を聞く。確かに最初のあのどこか殺伐とした雰囲気は思い違いじやなかつたのか、まさかそこまでピリピリしていたのか色々思考を巡らせていた。すると直道が、ですがと話を続け

る。

直道「そんな彼らを変えたのは他でもない、貴方なんです。貴方に罵詈雑言を浴びせた人間がいるにも関わらず、貴方は怒鳴つたりするばかりか、その人達にも優しさを向けました。貴方のその優しさ、懐の深さに誰もが心を動かされた…！いいえ、このクラスの雰囲気を良い方向へ変えて下さいました…！私達でもどうしようもなかつたことを、貴方はいとも簡単にやつてのけてしまつたのです…！」

普段クールな雰囲気を醸し出している直道だが、ここまで話すときには少し興奮気味になつていた。それ程感銘を受けたのだろう。そして、その話を聞いていた明久はと言うと…、

明久「えーと…僕、別にそんな大層なことをやつたつもりは無いよ??」

何のことかさっぱり分かつておらず、目をぱちくりさせてきよとんとしていた。それを見た直道は一瞬驚いたが、ふつと軽く笑つた。  
直道「こう言うのは自分自身では分からぬものなんです。とにかく僕が言いたいのは、貴方にはばらばらになりかけたAクラスを纏める程の力が秘められている凄い人、と言うことです。」

明久「あははは…。面と向かつてそこまで言われると中々照れくさいけど、ありがとっ！」

『おーい吉井ー！つち来いよー！』

明久「あ、じゃあごめんね。」

宴は最後まで盛り上がつた。

## 第陸話 交流会

試召戦争から2日経つた日曜日。駅前の噴水広場には、明久を待つ優子達がいた。

雄二「つたく明久のヤツめ…。学校の時以外でも遅刻しやがって…！」

康太「……目覚ましの電池を変え忘れていたらしい。」

秀吉「まあまあ良いではないか。気長に待てば良いじゃろう。」ため息交じりにこぼす雄二を秀吉が宥める。康太はいつものだからと特に気にする様子はなかつた。

菜々実「ふう…、とても良いお天氣ですね♪」

美月「だね♪昨日の予報だと曇りか雨つて言つてたけど、予報が外れて何よりだよねっ！」

光輝「にしてもじや!!いや、まさかこうして皆で出かける日が来るのはのおく！」

和博「せやなー!!昨日までの状況やとともに考えられへんかったこつちやな！」

寛定「ヒュラララララ！それもこれも明久屋のお陰だべな！明久屋にはただただ感謝しかねえなー。」

雅治「全くとよつ！ヤツにやあ驚かさればなしつたい！うつしフルコンボたいつ！」（ぴこぴこぴこぴこ！）

夏海「おめーは喋るんかゲームするんかどっちかにせえ…。」

各々で待ちがてら雑談をしていた。皆が話に花を咲かせていく中、内心そわそわしている者もいた。

（優子 sides）

うう…、猛烈に眠いわね…。そりゃあ無理もないでしようね…。

何せ他のメンツも一緒とは言え、吉井君と出掛けられるつて思つたら興奮して全然寝れなかつたんですもの。これじやあまるで遠足前の小学生じやない…。それだけならまだマシだったけど、やつと寝れたかと思つたら今度は無駄に早起きしちやつて、もう寝ることを諦めたアタシは、特に当てもなく集合時間より2時間半前に集合場所に来

ちやつたつてワケ…。

それはそうとアタシの格好、変じやないよね…??寝る前と家を出る前に一応念入りに確認してみたけど…。吉井君、褒めてくれるかしら…? //

愛子「ゆーこつ♪」

優子「うひやあつ!?愛子つて何よその目は…?」

急に愛子が後ろから抱きついてくるなり、今度はまじまじとアタシを見る。な、何なの…??と言うか、正直この時点でそこはかとなく嫌な予感はするけど…。

愛子「優子つてば、張り切つちやつてるネ♪」

優子「んなっ!?何の話よ…??」

愛子「良いんだよ、分かつてるから♪吉井君に可愛いつて言つてもらえるかなつてソワソワしてたんでしょ♪」

ほあつ!//

翔子「……氣合万端。」

優子「代表まで…。//

もー!!皆して勘弁してよーーつ!//何か無性に恥ずかしくなつてきたじやない…//と、ここで思わぬ援護が…!

美月「いやいや、愛子も人のこと言えてなくなっい?だつてそれ、どう見たつて康太っちの気を引こうとしか思えないんだけどな♪」

愛子「ふあつ!//ななつ…、何のことカナ…?//

優子「そ、そうよつ!!アタシが吉井君を意識してるみたいに、愛子は土屋君を意識してるんぢやないの♪」

ええい、もうこうなればヤケよ!どうせばれてるんなら、これを逆手に取つて反撃に出るまでっ!!

愛子「う…//もうやめてえええ…//////」

菜々実「ゆ、優子さん…。完全に開き直りましたね…。」

翔子「……菜々実。……それはしー、よ?」

愛子がさつきと打つて変わつて赤面する。反撃成功ねつ!ところで、2人が何か喋つてるみたいだけど、何かしら??遠目からだからよく分からなければ、何て言うかまるで変なことを言う子供とそれを注

意する親みたいな…。

?? 「皆一、遅くなつてごめん！」

ふと聞き覚えがある声が聞こえてきた。振り返るとそこにはアタシの大好きな人が急ぐようでこつちに走つて来てたわ…／＼よしっ！今日はちょっとでも距離を縮めてみせるんだから…!!

（優子 side out）

遅れて姿を見せたのは、今日出掛けるメンバーの最後の1人、吉井明久だつた。余程急いでいたのか、雄二達の元に合流するなり中腰体形で肩で息を整えていた。

雄二「遅いぞ明久！お前で最後だ。」

明久「ごめんごめん！目覚ましが壊れちゃつてさく、あはははは……。」

秀吉「全く…、しようがない奴じやなあ…。」

康太「……こう言う抜けがある所が明久らしい。」

すると、そんな明久の元に光輝と夏海が近付く。

光輝「よつ明久！普通に走つてきたつて事は、無事完治した様じやのぉ！」

明久「うん。しかも予言通り昨日の20時には痛くなくなつたんだ！」

光輝に夏海さん、本当にありがとう!!

夏海「にひひ！アタイらはやつて当然の事をしたまでじや。んな気にすんなつて！」

2人の医者は、すつかり元気な身体を取り戻した明久を見て心底嬉しそうな表情を見せた。

優子「吉井君！もう怪我は大丈夫なの??」

明久「あつ、木下さん！僕はこの通り完治したよ！心配してくれてありがとう。」

明久は自身の心配をしてくれた優子に笑顔でそう返す。正直これだけでも優子にとつてダメージは大きかつたが、更なる追撃が優子を襲う。明久は優子を凝視しており、優子はどうしたのと言わんばかりに小首を傾げた。すると明久が口を開けた。

明久「木下さん。その純白なワンピース姿、凄く綺麗で良く似合つ



和博「しつかし何や、もうちよい良えタイトルがあつたやろ…？」

優子「しかもこんなタイトルでよく賞が取れたわね…。」

康太「…世も末。」

翔子「…そろそろ時間。」

光輝「じやな。取り敢えず見ようやー。」

雄二「何か全然想像がつかねえんだが…。」

美月「アハハ、だよね…。タイトルとジャンルがかけ離れてるよね…。」

全員この作品に対して色々思う所を吐露しつつも、劇場に入つて  
いつた。そして――

明久「何かとても良い映画だつたね…！」

雄二「確かに…！あれなら賞が取れるわな…！」

康太「…何から何まで予想外。」

秀吉「あのような演技方があつたとはの…！良い演劇の勉強になつたぞい。」

翔子「…感動した。」

優子「あんな恋もあるもんなのね…！」

愛子「いやあ、凄かつたね…。」

光輝「ふむ…。人の心つちゅうモンは、実に複雑なモンじやのう…。」

…」

夏海「たまにはあんな物を見るのも、悪くねえの。」

菜々実「これでタイトルがもつとまともだつたら…、言う事は無かつたのですが…。」

雅治「菜々実よ、そこはもうツツコんだらダメとよ…！」

寛定「うおくん…、泣けるだく!!」

美月「うううう、あたしも涙が止まんないよおおお!!」

和博「そこ2人はさつさと泣き止まんかいつ！せやけどいや、ありやあ中々の名作やつたなー!!」

皆が口々に感想を述べる。すると不意に複数人の腹の虫が鳴つた。

明久「お腹も減ったし、どこか食べに行かない？」

優子「そうね。どこかでお昼を食べましょ。」

一行は映画館を後にし、近くにあつたファミレスで昼食を摂る事にした。

明久達はファミレスに入り、メニューを頼んで昼食を摂っていた。

光輝「こここのコーヒー旨いのお!!」

雄二「こりやあ良いな。こつちのステーキも中々イケるぞ！」

雅治「このエビピラフもうまかよ！」

菜々実「フルーツパフェ、なまら美味しいです♪」

美月「おっ、マジ? ならさーななんみん、こつちのガトーショコラとちよつとばくつてみん? 美味いよ☆」

菜々実「みーちゃん…えへへ…、ぱくりましよう…♪ ありがとうございます…♪」

寛定「このアイスココアもイケるだよ♪」

秀吉「寛定よ…。見間違いかの…? お主、何故アイスココアに砂糖を13杯も入れておるのじや!」

夏海「コイツ、甘党の♪」

康太「……甘党の一言で片付くレベルじゃない。」

そんな中、余程お腹が空いていたのか、明久はスペゲッティを頬張っていた。スペゲッティを食べ終えた明久に、優子が話し掛けた。

優子「ねえ、吉井君。そんなにお腹空いてるの?」

明久「うん、まあね。」

すると優子は、自分が食べているクレープを明久に差し出した。

優子「じゃあ良かつたら、食べ掛けだけど一口食べる? 後でアタシも食べるから、ある程度は残しといてね?」

明久「えつ、良いの?なら、頂こうかな。」

優子「う、うん!! それじゃ吉井君、あくん。」

明久「わあつ、ありがとう!! (モグモグ)」

優子から差し出されたクレープに、明久が躊躇いなくパクつと食い

ついた。そしてよく味わうように咀嚼する。

優子「ど、どうかしら…？」

明久「うん、美味しかったよ!!」

優子「そ、そう…。なら良かったわ。//」

優子はどこか嬉しそうに、明久が口にしたクレープを食べた。

夏海「ほおくん…。間接キスたあアンタもやるのぉ~。」(ニタニタ)  
隣から小声でそう言われると、優子は思わず口に含んだクレープを吹き出しそうになつた。

優子「ちつ、ちちち違うわよ…！アタシはただ…!!//」

あからさまに動搖する優子に、夏海は意味ありげに笑いながら「へいへい分かった分かった」と言い軽く受け流した。優子はちよつと腑に落ちなかつたが、ここはこの状況に甘んじることにした。

そんな中、明久が何かに気付き、近くにあつたナップキンを手に持つた。

明久「木下さん。ちよつと良いかな？」

優子「ほえっ？」

明久は、ナップキンで優子の口の周りを拭いた。

明久「クリーム、口の周りに付いてたよ。」

優子「……！//あ、ありがとう…//。」

照れている優子に、ニヤニヤした愛子が突っ込んできた。

愛子「良かつたね、優子～。」(ニヤニヤ)

優子「な、何よ…//別に良いじゃない!!それより愛子も、土屋君にしてもらえば?」

愛子「ふえつ!?ボ、ボクはその…何て言うか心の準備が…。//ゴニヨゴニヨゴニヨ

菜々実「愛子さん…。人にはあれだけ言うのに、いざ自分のことになると軟弱になるんですね…。」

愛子「うぐつ!?な、なみん!?ボクが言うのもなんだけど、言う事が結構容赦無くないつ!?」

優子「えつ…?いや、アタシ別にそこまで言うつもりはなかつたんだけど…??」

翔子「……菜々実が分からぬ。」

思わぬ伏兵に愛子は心臓を槍で突き刺され、抉られた氣分だつた。それは傍から聞いていた翔子や優子でもそう思つており、流石の優子もこれには同情した。

明久「木下さんどうかしたの？工藤さんが小言を言つたかと思つたら思いつきりショックを受けたみたいけど？」

優子「何でもないわ。気にしないで…。」

明久「??そこまで言うんなら分かつたよ…？」

そう言うと明久は、カツブに注いであつたカフェオレを飲んだ。その時、ヒュッとフォークが明久の頬スレスレに飛んできた。飛んできたフォークは、壁に突き刺さつた。何が起つたのか理解が追いつかないまま飛んできた方向に目をやると、そこにいたのは、途中から西村先生の教育的指導を受けることになつたあの人物たちだつた。

島田「ア～キイ～～、何そいつらと一緒にいるのよ～!!」

姫路「そうです!!と言つうわけで、オシオキですつ！」

須川「そうだ…!!異端者はー」

F F F 団「〔全員死刑だ!!〕」

島田と姫路、それにF F F 团が現れた。

優子「アンタ達また懲りずに…！」

明久「木下さん！そんな事言つてる場合じやないよ!!フォークやら

ナイフを持つて迫つてきてるよ!!」

光輝「チッ！ここじやあ分が悪い…！取り敢えず出るぞ！」

光輝の言葉で明久達はその場から飛び出し、食事代だけ店員に渡すと一斉に逃げ出した。

島田「ああっ、こら！待ちなさいー！瑞希、追うわよっ！」

姫路「は、はい！分かりました！」

F F F 団「〔異端者は1人残らず死刑に処する!!〕」

島田達も後れを取りながらも、彼らを追い掛けた。

~~~~~

島田「アーキイイ!!、待ちなさい!!」

姫路「明久君。今なら鉄パイプで許してあげますから観念して下さい。」

和博「アホかおめえら!!許す許さん以前に鉄パイプで殴ろうとしない。」

なつ!!」

明久達は島田達から逃げ回っていた。

明久「どうしよう!これじゃあ埒が空かないよ!!」

秀吉「ぐぬぬ…、万事休すか…。」

すると走りながら考え事をしていた夏海が何か閃いたようだ。

夏海「よつしや皆、このまま学校へ行くんじゃ!」

皆、一瞬彼女が何を言っているのかわからなかつたが、後になつて意図することが理解できた。一部を除いて。

優子「…! そう言う事ねつ!」

明久「木下さん、どう言う事?」

優子「吉井君、学校に行つたら試召戦争が出来るわ!」

明久「でも、僕はそんなに点ないけど…。」

雄二「成程…! 明久、確かにいつもみたいに俺達だけじゃ姫路と太刀打ちできねえし、何よりあの人数を捌ききれねえ。だがな、今ここにAクラスの生徒が何人いると思う?」

明久「あつ…!…そつか!」

雄二「分かつたら、さつきと学校に行くぞ!」

彼らは作戦が固まると、学校を目指して道を突っ走る。そして一

菜々実「みつ…、見えました…!」

雄二「よしつ、このまま行くぞ!」

そして明久達は遂に校門を抜け、校舎に入った。そこで走るのをやめた。すると、偶々彼らの近くに高橋先生と三浦直道の姿があつた。

直道「おやおや皆さん、どうしたのですか?私服姿で学校に来るなんて…??」

光輝「わりいが話は後じや…! 今は一刻の猶予もねえんじゃ…!!

翔子「…それより先生、お願ひがあります…!」

高橋「はい、何でしよう？血相を変える程のことがあつたのですか  
…？」

寛定「今すぐに召喚許可をしてけろ！」

高橋「えつ？で、ですが…。」

高橋が躊躇つている間にも、島田達が徐々に近付いてきた。

美月「先生早くっ！もう時間ががないんですっ！」

高橋「えー…、…分かりました！承認しましょう！」

今一状況がよく呑み込んでいたかった高橋女史だったが、少なくともあまりよろしくない状況であることだけは何となく察しがついた様で、試験召喚ファイールドを開闢させた。

夏海「この際じや！ここは1つアタイらにやらせてくれん？」

優子「分かつたわ！頑張ってね！！」

光輝達7人が島田達に立ち塞がるように明久達の目の前に出た。すると直道も、光輝達に交じつて前に出る。

雅治「ん？おはん…！」

直道「まだ状況を呑み込めていませんが、恐らく貴方達に危害を加えようとしているのでしょうか？でしたら僕にも是非手伝わせて下さい。大切な仲間を守りたいのは、僕も同じ事ですからね…！」

寛定「おしょーしなつし！助かるど！」

光輝「つしやあ、後はこっちのモンじゃ！どつからでも来えや！」  
転入生組&Aクラスの戦う軍師ががやや喧嘩腰（特に光輝と和博）で島田達を迎える。

島田「面白いわ、やつてやろうじやない！いくわよ瑞希！」

姫路「はいつ！美波ちゃん！経験値と人数ではこちらの方が上です

！」

F F F 団「「異端者には死を!!」「

「「「「「サモン！」」「」」

総合科目

A クラス

中岡光輝（3792点） 中岡夏海（3819点） 重谷和博（3720点） 空知雅治（3804点） 氷川寛定（3935点） 鈴木美

月（3950点）松井菜々実（4000点）三浦直道（4512点）

V S

Fクラス

姫路瑞希（4012点）島田美波（503点）FFF団（805  
250点）

明久「うわあ…、すごい点数だね……！」

光輝「ひつひつひ！曲がりなりにもわしら、Aクラスじやけえの。」  
感心している明久に、光輝が力強く笑う。一方で雄二達は、ここで  
明らかとなつたAクラスの面々の点数を見て冷静に分析する。

雄二「今回はこいつらと戦うことはなかつたが、やっぱ流石はAクラ  
スと言つたところか…！無駄がねえ…！」

秀吉「もしあのまま普通に試召戦争をしていれば、15分も経たぬ  
内にやられておつたかもしれんの…！」

康太「……敵に回したくない。」

一方、対峙した島田達は表示された点数を見て驚愕し、文句を言う。

島田「ちよつと何よその点数!? それに集団で反則でしょうが!!」

姫路「そうです！卑怯ですっ！」

和博「じゃかましいわ!! 2人して明久をボコしとつたお前らにだ  
きやあ言われとーないわドアホつ!!」

夏海「つつーかあんたらも集団じやろうが? それでおあいこじやろ  
?」

美月「取り敢えず早いとこ終わらせちゃおつか? あんまり時間を取  
られたくないしさつ!」

美月の召喚獣は島田の召喚獣を、光輝と和博の召喚獣はFFF団の  
召喚獣をそれぞれ瞬く間に一蹴し、8人で姫路の召喚獣を蹴散らし  
た。

西村「戦死者は補習だあああ！」

姫路「待つて下さい！今日は休日ですよー！」

西村「そんな物は関係ないっ!! 平日だろうが土日祝日だろうが戦死  
者は纏めて補習室行きだあああ!!」

「「そんなあ～～～～～～～!!」」

何故か西村が天井裏から出てきて、島田と姫路、FFF団を纏めて  
担いで連れ去った。

…………

島田達の騒ぎが収まり、校門で直道と別れた明久達は学校を後にし  
ていた。

明久「すっかり夕方になっちゃつたね……。皆ごめんね、僕のせいで  
……」

優子「そんな事ないわ！元はと言えば難癖つけて追い掛け回したア  
イツらが悪いんだから、吉井君が気に病むことはないわよっ！それ  
に、何だかんだで楽しかったわよっ。」

雄二「悲しいかな、あれがいつもの事だつてのはお前自身もよく分  
かってる筈だぜ。今更引け目なんか感じる必要はねえさ。」

翔子「……吉井は悪くない。」

美月「そようそよう♪寧ろ悪いのはアイツらだし、気にしないで！」

秀吉「にしても、あやつらのあの執念深さには怒りを通り越して最  
早ある種の尊敬の念すら感じるわ……。」

康太「……見習いたくは無いがな。」

愛子「いやあ～それにしても、今日は刺激的な1日だつたね～！」

寛定「おら、こんな刺激はモー勘弁だべ～……。」

暫くこのように雑談していると、美月が何か良い事を思い付いた顔  
になり、明久達の前に出た。

美月「ねえねえ～！そんな刺激的な1日を共にしたあたし達はもう親  
友なんだから、名前で呼び合おうよっ☆」

明久「それ良いね！僕は大歓迎だよっ！」

雄二「良いんじやねえか？その方がお互いやりやすいだろ？」

康太「……構わない。」

秀吉「うむ、合点じや！」

翔子「……分かつた。」

優子「そうね、アタシもそうさせて貰うわ。」

愛子「オッケー♪」

明久達は快く受け入れた。そんな様子を見て、光輝達転入生組はやつぱりかと言わんばかりにお互いの顔を見合つて微笑んだ。

雅治「ふふふふふつ！ま、そんなこつちやろうと思うたばい！」

菜々実「みーちゃんらしいと言えば、みーちゃんらしいですね……♪」

和博「ほなき、連絡先も交換しようやー・そこまでするんやつたら、これは外せへんやろ？」

今度は和博が携帯を取り出し、提案してみる。当然異論が出る訳もなく、皆で連絡先の交換もした。

この日は皆で連絡先を交換し解散となつた。かくして、この波乱の1日がきつかけで新しい関係が築かれたのだった。

## 第漆話 変人教師登場

「明久 side」

ふわああ……。

交流会から一夜明けた月曜日。時計は7時40分を指している。朝ご飯を手早く済ませた僕は登校の準備をしていた。えつ？ 遅刻の常習である僕が何でそんな時間から起きてるって？ 失敬な！ 僕にだつて遅刻せずに行つた日はあるよ！ ただ、数える程しかないけど……。まあでも、確かに今までの僕ならこの時間もまだ夢の中だろうね……。けど今日からはそもそもいかなくなつたんだっ！

と言うのも――

ピンポーン

おつと、噂をすれば来たみたい！ あんまり外で待たせるのも申し訳ないから足早にドアへ向かう。ドアに付いてる覗き窓をみると、予想通りの人物がいた。

優子「明久君、予定より少し早いけど來たわよ。」

明久「大丈夫大丈夫！ でも優子さん、まだ準備が出来てないから中に入つて待つてくれるかい？」

優子「ありがとう。ならお邪魔するわね。」

実は今日から、優子さんと一緒に登校する事になつたんだ！ そのきっかけは、寝る直前の僕に掛かってきた一本の電話だつた。

「明久の回想」

昨日の夜、僕が今気に入つてているRPGをやつてる最中のこと――

ピロロロローン！

明久「ん？ こんな時間に電話？ 誰からだろ……？」

突然携帯から着信音が鳴り、ゲームを中断して携帯を手に取つた。サムネイルには『木下優子』と書かれていた。何故に電話を掛けてきたのか疑問を抱きつつ、電話に出た。

明久「もしもし優子さん。どしたの？」

優子「こんな夜遅くにごめんね。明久君にちょっと聞きたい事があつてね。」

聞きたいこと…?はて、何のことだろう…?まあ、聞けば分かるか。

明久「えーと…、何かな?」

優子「明久君つて、いつも何時頃に学校に行つてるの?」

明久「そ、そうだね…。大体時間ギリギリだよ。人に言うとかなり恥ずかしいけど…。」

自業自得とは分かつてはいるけど、改めて今の登校時間を誰かに言うのは何となくちょっと恥ずかしいなあ…。ましてや女の子に!そりゃあ普段から遅れて行く僕が悪いんだけどさ…。それを聞くと優子さんは「そう…。」とだけ言つて何やら少し考え込んだみたいだつた。本当にどうしたんだろ…?なんて思つていると、再び口を開いた。

優子「じ、じやあさ…! 明久君が良かつたらで良いんだけど、明日からアタシと一緒に登校しない?」

な、何だつて…?! 優子さんからそんな魅惑的な誘いが…!! 僕個人的には途轍もなく嬉しいけど…。

明久「それは良いけど…、でも何でまた??」

優子「アタシは今まで明久君の事を噂通りマイナスの人としか見てなかつた。でも、明久君と実際に関わつてみたら、マイナスばかりか寧ろ優しくて思いやりのある素敵な人だつて言う事を知つたの。明久君のお陰で、ウチのクラスは学力が全てじゃないつて事をやつと理解したの。ただ、今でも成績とかそういう表面上のものだけでしか見ていない人もいる。だから汚名返上する為に、今からでもちよつとずつ生活を改めようつて思つたの!だからその…、一緒に登校しない?あ、勿論明久君が迷惑じやなかつたらよ?!別に強要するつもりなんてないのよ!」

優子さん…!! 僕のことをそんなに考えてくれてるんだ…!! 生活改善も然り、何より優子さんのような美少女と一緒に登校できるつて、僕に対してメリットが多すぎるんだけど良いのかな?? あ、ちゃんと答えを言わなきや!

明久「うん、勿論良いよつ! そしたらよろしくね!」

優子「本当…?! アタシに任せてつ…やつた! //」

ん??最後の方は小声でよく聞き取れなかつたぞ…う?つていやいや、  
そんなことよりも—

明久「いやー、これから優子さんみたいな可愛い美少女と登校出来  
るなんて、僕は相当ツイてるなーっ!!」

優子「えつ……／＼／＼（ボンツ!!）

あれ??今度は思いつきり膨らませたお菓子の袋が破裂したような  
音が聞こえたのは気のせいかな……??

明久「ならさ、8時頃に僕の家に優子さんが来るつて事で良いかい  
?」

優子「う…、うん!!分かつたわ!じゃあまた明日ね。お休みっ♪」

明久「うん。お休み♪。」

心なしか、優子さんの機嫌が良くなつてた気がした。でも氣のせい  
だと結論付けて、その日はRPGの続きを少しだけやり、キリが良い  
所でやめてすぐに寝た。

＼明久の回想終了＼

そして今に至るつてワケさ!折角優子さんが僕の為にああ言つて  
くれたんだもん!こつちもそれに応えなきやね!よし、後はお茶を入  
れた水筒を鞄に入れてつと!

明久「お待たせ優子さん!行こつか!」

優子「うん!行きましょ!」

僕達は玄関で靴に履き替え、学校へと出発した。いやあゝこれが毎  
日の日課になるつて思うと、登校の時点ではテンションが爆上がりだね  
＼!

＼明久 s i d e o u t ＼

＼優子 s i d e ＼

今日から明久君と登校できるなんて、幸せ過ぎるわね＼!うふふつ

昨日帰つてから、秀吉にそれとなく明久君のことを聞いてみて正解  
だつたわ!明久君つてば、本当は物凄く他人思いで真つ直ぐな優しい  
人なのに、「観察処分者」つて言う肩書が独り歩きしちゃつてるせいで  
何かと冷ややかな目で見られちゃうんだから、それが堪らなく悔しい



し悲しいのよね…。だから、ちょっとでもそんなことが無くなるように張り切っちゃうんだから!!

そういう訳だから電話で言つたことに嘘偽りはないけど、本当の目的はちょっとでも明久君と一緒にいられる時間を作ることつ!!いくら仲良くなつたとは言つても、やつぱりクラスが違えばその分一緒にいられる時間も限られちゃうから、今回のことを探してみたの。正直言つてダメ元だつたんだけど、そんな不安とは裏腹に明久君はっきり快諾してくれた。そればかりか

優子『可愛い美少女……、かあ～…………♪』

昨日のやり取りを思い出して、またしても胸が高鳴ってしまう。明久君つてば、どこまでアタシの心を搔き乱したら気が済むのよ!?／＼対面してる時もそうだけど、電話越しでもあんな恥ずかしいことをポンポン出すなんて反則じゃない!!／＼それに明久君のあの口振りからして、明久君も楽しみにしてくれるつて分かったから、殊更提案してみて良かつたつて思う!やつぱ言つてみるものねつ!

明久「優子さん?」

優子「ひやい!?／＼なななつ、何かしら明久君?!／＼」

急にアタシの顔を覗き込んできたからびっくりしたじゃない!／＼あ、でも何か無邪気な子供みたいで可愛いわね……。／＼／＼

明久「どうしたの?さつきから急に黙り込んだりなんか百面相したりしてるけど…?それに顔まで赤いよ?」

どうしたもこうしたも、そりやもれなく片思い中の男子が隣にいるんだし、貴方のことを考えてたんだからそうなつちゃうに決まってるでしょ!?／＼／＼でも、超絶鈍感な貴方はそれに気が付かないんでしようけど…。

優子「だつ、大丈夫よ!ほら!本当にダメなら明久君の所に行く前に休むつて伝えるしつ!ね?」

明久「それもそつか!あ、でも本当にダメっぽかつたら言つてね?」  
優子「う、うん……。ありがとつ／＼

もー!何で気付かないの!?一応秀吉から聞かされていたけど、まさかここまで鈍いなんてね…。とは言え、良くも悪くも今回はそのお陰

で助かつたけど…。あ、でも明久君に優しくしてもらえたのも悪い気はしないわね…！う〜…、やつぱり何か複雑な気分ね…。ま、今は気付かれなくても良いわ。だつてアタシが振り向かせてみせるんだもの!!だから、今は明久君と登校するこの時間を楽しむことにしましょう♪

「優子 side out」

さて、突然だがここ文月学園には、変わった教師がいる。生徒から「鉄人」やら「生徒指導の鬼」等と呼ばれ恐れられている西村宗一も例外ではないが、それに引けを取らないかそれ以上に変わった…、と言うよりは、変人教師が2人存在するのだ。ここでは、そんな変人教師を紹介していくことにする。

1時間目のAクラスは、美術室で行われる。翔子達が待つていると、美術準備室登校する直結しているドアが開いた。そこから大きなあくびをし頭をポリポリ搔きながら、若い男性教師が出てきた。

秀喜「ふわあ〜…。んじや号令〜。」

翔子「…起立。気を付け、礼。」

『『『お願いします。』』』

砂辺「はあ〜あ……。何で授業しなくちゃいけね〜んだか…？やつきねえ〜な〜…。かつたりい〜…。」

とても教師とは思ひがたい発言が飛び出る。

砂辺「まあ良いや。本当は先週の木曜にこの授業が始まる予定だったけど、試召戦争とやらで流れちまつて今日が初めてやつたか？俺は砂辺秀喜。石川県の輪島市出身だ。まあ、適当によろしく〜。」

軽く自己紹介したその時。美術室のドアが勢いよくバタンと開いた。

西村「砂辺えーっ!!」

砂辺「ん？ 何だ宗いつつあんか〜。どうしたつていつてーつ!! 何すんだよ！ 何いきなり顔面パンチしてんだよ！」

西村「貴様ア!! 何故俺の机の上にケシカスが山の様にあるんだ?! 答えろ！ それと西村先生と呼べつ!! 話す時は敬語だつ!!」

砂辺「ん？ あ〜アレ？ 実に芸術的だろ？」

西村「どこがだ!! しかも俺の消しゴムを丸々1つ使いやがって!!」

砂辺「1つじやねえよ、3つだよつ! 我ながら力作だろつ? んなことも分からねえとか、お前だらんか!? その目は節穴なんか!?」

秀喜は何喰わぬ顔で鼻糞をほじりながら答える。その上何故か逆切れされ、いよいよ西村の怒りが爆発した。

西村「バカは貴様だこの野郎!! ふざけるな!! なお悪いわ!!」

西村はもう5発砂辺に強烈な拳骨を喰らわせ、怒り心頭のままその場から去つた。渾身の拳骨を喰らつた砂辺はうつ伏せでダウンしたが、何事も無かつたかのようにすぐに立ち上がつた。

砂辺「たあーっ…、朝っぱらから酷い目に遭つた…! クソ、あのジジイ…!! 人が折角机の上に芸術作品を作つてやつたのに…! やくちやもねえーやつちや…!!」

「砂辺先生。芸術云々以前に单なる迷惑です。」と、その場にいた誰もがそう突つ込んだが、それを直接口にする者は誰もいなかつた。

砂辺「ま、良いや。折角だしさ、何か俺に質問とかあつたりする?」

学校に来て間もない教師の最初の授業にはよくある教師への質問を受け付けてみる。すると1人の男子生徒が元気よく手を挙げ、秀喜は彼を指した。

生徒A「先生つて彼氏いるんですか?」

秀喜「お前今なんつった?! いてたまるかよつ!?

氣怠そうにしている彼でも流石にこの質問には一気に目を見開いて物凄く驚き、全否定した。まさかそんな質問が来るとは思つてもいなかつたのだろう。

秀喜「ほい他誰があるかうつて、またお前かよ? 今度は何だつてんだ?」

次の質問を受け付けると、同じ生徒が再度手を挙げた。他に手を上げている生徒がいなかつたので、怪訝そうな顔をしつつも彼に指した。

生徒A「先生つて彼氏いるんですか?」

同じ生徒が同じことを質問した。今度はニヤつきながら。

秀喜「はあ?!いる訳ねえつつてんだろーが!?さつきからこんのクソガキがあ!!ぶつ殺してやろうかゴルア!」

流石に秀喜は頭に来てかなり言葉遣いが汚くなつた。確かに確信犯で同じことを面白がつて聞いてくる男子生徒にも非はあるが、それに対する罵詈雑言の数々は教師としての品格があまりにもなさすぎる。

尚、運悪くこの発言が偶々廊下を歩いていた西村の耳に飛び込み、一瞬で15発もの拳骨を喰らい、大仏のような状態のまま授業が進められることとなつた。

そして、次に2時間目は教室で生物。2時間目スタートのチャイムが鳴つてしまふと、何故かモゾモゾ動く布の袋を傍らに持つた若い男性教師が姿を現した。

文太「よつしや号令つ！」

翔子「…起立。気を付け、礼。」

文太「えうつと、僕は天登文太。香川県の多度津つて言うド田舎の出身や。よろしく。」

この先生はマトモだなつと思つたその時、教室のドアが勢いよくバタンと開いた。

西村「天登おーつ!!」

文太「おゝ、こりやあこりやあ西村先生。どうしゃしたつて痛つ

?何するんつすか!?何で僕おがつしやげられんといけんの!?

西村「貴様あ!?何で俺の机の引き出しにひよこが20匹もいるんだ!?答える!」

文太「だつて先生、愛嬌ないんですけどん。」

西村「要らん世話だ!人の机の引き出しにひよこを飼いやがつて！」

文太「失礼なつ!!鞄にもあと13匹生まれたてがおつたでしよう

がつ!!鳴き声も聞こえんとか、あんたのその耳は飾りなんちゃん!?

西村「なお悪いわ!」

西村は再度文太に強烈な拳骨を喰らわせ、その場から去った。

文太「いたたく…。動物を可愛がつて何が悪いんだよ…。」

この人も破天荒だな。この時、その場にいた誰もがそう思った。すると袋から何か出てきた。それは――

『『コ…、コブラーネット?!』』

そう。コブラだ。小柄ではあるのだが、コブラがにゅるにゅると袋から姿を現したのである。

文太「ぬあつテメエ!?誰が出て良いつつた?!」

そう言うと彼は、コブラの背後に回り込んで背後から足をかけて剣部に手を回し、コブラの胴体を挟んで締め付けた。

生徒B「すげえ…。コブラにコブラツイストかけてやがる…。」

そうして彼は無事コブラを捕まえ、袋に戻した。しかし――

西村「……………。」ゴゴゴゴゴゴゴッ!!

『『あつ……………。』』

そんな文太の背後に、西村が一際強い殺意のオーラを発しながら仁王立ちして佇んでいた。しかし、当の文太本人はそれに全く気付くことなく、汗を拭つた。

文太「ふうう……。つたく、世話が焼けるぜーーー！」

西村「それはお前のことだ大馬鹿者っ!!!!」

文太は力が目一杯込められた西村の拳を15発程喰らい、その場に暫くダウンした。その後すぐに復活したものの、半殺し状態のまま普通に授業が行われることになろうとは思つてもみなかつたAクラスの面々は、どうすれば良いのか分からぬ状態だつた。

更に場面が変わつて三時間目終了後の休み時間。明久と雄二が自動販売機コーナーから教室に戻つてゐる時、あの二人が西村に追われている所に遭遇した。しかも、自分達に向かつて。

西村「コルア貴様ら!! 室内をローラースケートで移動するなーーーっつ!!」

秀喜&文太「[ギ]よえええーーーっ!!」

明久＆雄二「「ぎゃああああーー!?」

明久と雄二も反射的に、秀喜と文太と共に西村から逃げ出した。

秀喜「ん? 何だお前ら? お前らも何かやらかしたってか?」

明久「違いますーつ! ただの反射ですーつ!」

文太「そうなのかな!? けど、早い話が前科者ってヤツか?」

雄二「まあ、間違いぢやないがな!! っとおわつ!?

逃げながら会話をしていると、行き止まりに来てしまつた。

西村「よおし追い詰めたぞ……。……つて何で吉井と坂本がいるんだ  
?」

明久「あははは……、鉄人がこつちに向かつてきたものだからつい  
……。」

西村「全くお前らは……。取り敢えずお前らは下がつてろ。今回用  
があるのはそつちの馬鹿2人だからな。それと西村先生と呼べと何  
度も言つているだらうが……。」

そう言つて、西村は秀喜と文太をボコボコにした。

砂糸「いつてええくくくく。」

明久「うわあああ……。これ滅茶苦茶痛いヤツだよく……。」

雄二「まさか教師で鉄人に目を付けられてるヤツがいるとはな  
……。」

西村の鉄拳制裁を喰らつた教師2人を、憐みの目で見る明久と雄二  
であつた。だが、同時に自分達も人の事を言えないと思付き、何とも  
言えなくなつたのは内緒だ。

~~~~~

明久「一つてことがあつたんだ。」

優子「そ、そんなことがあつたの?」

愛子「アハハッ! やっぱりあの2人、凄く面白いんだねー!」

時は変わつて昼休み。明久達は屋上で昼食を取り、その時に休憩時  
間に起きた出来事を話した。因みに今回、転入生組は別件があるとい  
うことで一緒ではなく、ここには明久、雄二、康太、秀吉、優子、翔  
子、愛子の7名だけがいる状況だ。いつもなら一緒なのだが。

秀吉「じゃが、お主らもとんだ災難じやつたの。」

康太「……反射的に逃げるあたり、流石だ。」

明久「あはははは……。そりや僕らは普段追われる側だからねう……。だから条件反射でそうなつちやうんだよね～つい……。」

優子「もく、明久君つてば……。」

優子が呆れたように明久をジト目で見据えると、明久はあははと乾いた笑いしかできなかつた。

雄二「それはそうと、あの2人は何者なんだ？教師でありながら鉄人にマークされるなんて、前代未聞じやねえか……？どうやつたらそうなんだよ……？」

翔子「……生徒とのゲームや漫画の貸し借り、色々な動物の放し飼い、生徒教師問わない罵詈雑言の数々、落書きとその他諸々。」

明久「う、嘘でしょ…………？下手したら僕や雄二より酷い気がするんだけど……。」

翔子の発言を聞き、呆気にとられる明久。しかし愛子が、「あつ！でもー。」と言葉を発する。

愛子「色々やつちやつてるけどさ、あの2人つて何だかんだで生徒からの人気は凄いんだよー？」

「「えつ？」」

彼女の言うことに、一同がきよとんとする。すると秀吉と優子も何かを思い出したようにああと溢した。

明久「それつてどういうこと？ゲームの貸し借りする位だから距離が近いってこと？」

優子「確かにそれもあるわよ。でも一番の理由は、どんな時でも自分の仕事よりも生徒を優先するから。ちよつと前にね、砂辺先生が職員会議を無断欠席したことがあつたの。当然他の先生は良いと思わなかつたし、それが判明した途端西村先生も連行しようとしたんだけど、いざ探してみると、ウチの学園の生徒が他校の生徒からいじめられてたみたいで、そのいじめていた生徒をボコボコにしてたんですね。他校とは言え、生徒であつても一切容赦しなかつたみたいよ。つまり先生が職員会議に出なかつたのは、その前にいじめの相談を受け

てて、いじめつ子を懲らしめる為つてことよ。」

雄二「おいおいマジかよ…！んなことがあつたのか…！？」

秀吉「それだけではない。ウチの部の後輩から聞いた話なんじやがの、そやつは両親に…、所謂モンスター・ペアレンツに悩まされておつたんじや。放課後に1人愚痴を溢していた時に偶々それが天登先生に聞かれて、そのまま打ち明けたそうなのじや。するとどうじや、冷静ながらも血相を変えて無理矢理両親の職場に案内させたは、職場に押し掛けて両親をその場で叩きのめしたそうじや。それもその日はかなり重要な職員研修があつたのじやが、にもかかわらずそれをすっぽかしてまで来たそうじや。それ以来、両親は完全にトラウマになつてしまいすつかり考え方改めたみたいで、お陰でそやつ自身も元気を取り戻したぞい。」

明久「うわあああああ…！凄いね…！」

愛子「でしょ？普段こそ手を焼かされている西村先生も、周りの目を気にせずに自分のことよりも生徒のことを第一に考えて一切の躊躇いなく実行に移せる所は凄く感心してるんだよ。でも、やつぱりちよつと強引な所もあるから冷ややかに見る先生もいたりはするけど、学園長をはじめ西村先生、高橋先生、福原先生みたいに一部の先生からは高く評価されてるんだつて。」

康太「……人は見かけによらない…か…。」

彼らの知らない2人の一面を知り、感嘆する一同であつた。するとここで、優子からある提案が出る。

優子「ねえ、今日から定期的に勉強会でもやつてみない？」

明久「？どうしたの突然？」

優子「だつて、せめて来年は皆一緒のクラスが良いもの！その為には、今以上に学力が必要でしょ？」

明久「うー確かに…！僕なりにやつてみ始めたのは良いけど、やつぱりそれじやあどうしても限界があるからね…。」

愛子「良いじやん良いじやん！ボクも来年は皆で同じクラスが良い！だからその話、乗つたよ！」

雄二「そうだな。ならお言葉に甘えさせていただこうじやねえか。」

お前らも良いよな？」

康太「……愚問。」

明久「当然じゃないか！僕だつて来年は優子さんと同じクラスになりたいしさ！」

秀吉「わしも問題ない。しかし、部活の時だけは参加できんことを許してほしいのじや。」

優子「できるときにやれば良いだけだからその辺は大丈夫よ。」意見が纏まり、全員一致で定期的に勉強会を行うことが決まった。と、ここで愛子が疑問を投げかける。

愛子「やるつて決めたは良いけど、いつからやる〜？」

愛子の質問に、明久が答える。

明久「今日からやろうよ！折角決めたんだから早速やつてみようよ！」

雄二「だな。折角モチベーションが高まつたんだもんな。鉄は熱いうちに打つってヤツか？」

愛子「今日はプールの点検がある関係で無いよ。」

秀吉「こつちはそもそも今日は部活の日ではないから大丈夫じゃ。」

優子「なら決まり！早速今日やりましょう！」

翔子「……今日はウチに来ると良いわ。……大人数になるでしょうし、その方が多分ちょうど良い。」

明久「分かったよ。ならこれ、光輝達にも伝えなきやね！」

かくして、明久達の学力アップ計画が始動することとなつた。「皆で同じクラスになる」と言う来年の目標に向けて――